



日本よ、今、闘論！倒論！討論！2025第934回
明治維新 近代グローバリズムで

日本が得たもの失くしたものの

R7/11/7

パネリスト：

稲垣ひでや（執筆業・新党くにもり関西代表）※リモート出演

宇山卓栄（作家）

大場一央（儒学者・早稲田大学非常勤講師）

富岡幸一郎（文芸評論家・関東学院大学教授）

茂木誠（作家・予備校講師）

吉野敏明（日本誠真会党首・医療問題アナリスト）

司会：水島総

水島「皆さん、今晚は」

一同「(礼)」

水島「闘論！倒論！討論！2025第934回目の討論となります。今日は、これまでも何度かやって参りましたが、明治維新で、我々が考えている近代グローバリズムで日本が得たもの。それは戦後の問題もありますけれども、ずっと明治維新以来、我々の日本の近代化というか西洋化とか脱亜入欧とか、こういった問題で、本当にこれで良かったのかというのは、明治維新から遡らなきゃいけないということ。最近は結構、そういう意見も出るようになってきました。石破さんの『明治維新は素晴らしい』という一面的、まあ、彼は色々な面を持っていますから言えませんが、明治維新が本当に素晴らしかったというだけではないものがあるんじゃないか。つまり今、失った大事なものが相当ある

んじゃないかと。

それが今、戦後の80年、そこまで響いているんじゃないか。例えば皇室の祭祀の中に、仏教と儒教というか、まあ、朱子学系ですけども、こういった祭祀が一切、無くなりました。所謂、皇国史観というか、そういうイデオロギー的な形になっていったという話もあります。これは色んな考え方がありますから、議論が出来たらと思います。そういう中で日本の良きものが失われたんじゃないかということがありまして、今日、改めて高市内閣が始まった。そして一般的に言えば、保守が再生するんじゃないかとか、色んな言い方があります。

いやいや高市さんは、本当はグローバリストですよという意見もあります。自民党そのものがどうなんだっていうこともある。そういう意味で、今日は明治維新から日本の近代や、近代化やグローバリズムについて話し合ってみたいと思ひまして、それぞれ見識をお持ちの皆さんをお招きしています。では、ご出席の皆さんをご紹介します。まず文芸評論家で関東学院大学教授の富岡幸一郎さんです。宜しくお願いします」

富岡「宜しくお願いします」

水島「富岡さん、ついに最年長の場所ですね」

富岡「はい（笑）。緊張しております（笑）」

水島「作家で予備校講師の茂木誠さんです。宜しくお願いします」

茂木「はい、茂木です」

水島「日本誠真会党首で医療問題アナリストの吉野敏明さんです。宜しくお願いします」

吉野「はい。宜しくお願いします」

水島「作家の宇山卓栄さんです。宜しくお願いします」

宇山「宜しくお願い致します」

水島「儒学者で早稲田大学非常勤講師の大場一央さんです。宜しくお願いします」

大場「宜しくお願い致します」

水島「そして、運動家でもあります、西郷南洲の研究家で本も何冊か出している執筆業と新党くにもり関西代表の稲垣ひでやさんです。宜しくお願いします」

稲垣「宜しくお願いします」

水島「今日は以上の皆さんで明治維新について改めて話し合いたいと思ひ、今に繋げたいという気持ちがあります。まず皆さんが日本の西洋化や近代化、また明治維新でお考えになっていることを、それぞれ10分以内で、概略というか、自分の持っている感じをお話し戴けると有難いと思ひます。富岡さんからお願いします」

富岡「今日のテーマは非常に興味深いっていうか大事で、今年は戦後80年なんですけれども、やっぱり戦後80年のことを正確に考える上でも、近代150年、60年という明治維新以降の日本の近代化っていうことを改めて捉える必要があると思ひています」

水島「うんうん」

富岡「あとでお話ししたいと思ひているんですが、島崎藤村の『夜明け前』という明治維新を描いた本を4冊、文庫本で持って来たんですけど」

水島「凄いですね、これは凄い」

富岡「そんなお話を出来たらと思ひています。例えば、夏目漱石が明治40年ぐらいに『現代日本の開花』という結構、有名な講演をやっています、これは和歌山か何処かでやったんですけども、日本の近代化は西洋化であると。それが日本の近代化っていうのは、ただ外圧、まあ、当然、そうですけど、ペリー来港っていうか、西洋列強の外圧によって近代化をせざるを得なかった。つまり本来の近代化は、この内発的な民族、その国の内側から、蕾から花が段々咲くように近代化が為されて行くと」

水島「うん」

富岡「それが日本の場合、やはり非常に急速な外圧があって、勿論、あの時点で開国して近代国家を創らなければ、西洋の植民地になっていた訳ですけども、ただ、そういう急速な近代化が齎した弊害、今日の言葉で言えば『失ったもの』ということ、漱石が講演で非常に感慨深く言っていて、この近代化は明治以降、まあ40年ぐらいですけども、何か我々日本人はピョンピョンと飛び跳ねてスキップして走っているんだと。本来は一步一步、地面を踏みしめて行かなきゃならないところを、我々は物凄いスピードでスキップをしていると」

水島「うんうん」

富岡「つまり当然、端折っているものとか失っているものとか、そういうものがいっぱいあるだろうっていう話を、彼がしているんですね」

水島「うん」

富岡「それで明治の後半ですよ、恐らく、かなりの方がその話に共鳴したんじゃないかと。ですから、そういう意味では、この明治近代化、西洋化というのは何であったのかっていうのは、非常に重要な課題だと思っています。あの『逝きし世の面影』でしたか、ああいう本があって…」

水島「渡辺京二さんのね」

富岡「そうですね。そういう日本らしさとか、日本人の生活感とかっていうものが西洋化の波によって消えて行った。まあ、それもあるけれども、私が後程、お話ししたいのは、やはり天皇」

水島「うん」

富岡「皇室の問題が一番、大きなポイントかなあとと思っているんですね。これは、実は、『夜明け前』も、そうですね、やっぱり明治以降の天皇の在り方、これは、それまでの長い天皇の歴史とは非常に異なっている訳で、その辺りですね。明治以降の近代化の問題は、この天皇の在り方」

水島「うん」

富岡「これは大日本帝国憲法に記されていますし、それから教育勅語についても、後程、論じたいんですけども、昭和に入って、現人神としての天皇というのが、非常に強く出て来ますね。私自身は、大日本帝国憲法って非常に良く出来た憲法で、伊藤博文とか諸々の人達が作った芸術作品のような憲法だと言っているんです。ただ芸術作品って壊れ易いところもあると。それは昭和に入って『国体明徴運動』と『天皇機関説』という形に分裂していくと。ですから、やっぱり明治の在り方、明治の憲法、天皇の在り方っていう問題が当然、出て来るのかなと」

水島「うん」

富岡「今日は、その辺りを掘り下げて論じてみたいと思っています」

水島「そうですね。おっしゃるように、大事なことを指摘して戴いたと思うんですけど」

富岡「はい」

水島「やっぱり結局、基本的に統帥権っていうね、どの国が、誰が力を持っているかっていうのは、統帥権の問題で政治家と軍部が分裂しちゃってね、この問題と、戦後の国民主権というね」

富岡「ああ、はい」

水島「殆どの国にはない、国民主権という言葉が当たり前のように考えられて来たって。これも繋がっている感じがしましたね」

富岡「うんうん」

水島「是非、そういうところをね」

富岡「そうですね。はい」

水島「はい。では、茂木さん、お願いします」

茂木「はい。明治維新をどう見るかっていうのは、江戸時代をどう見るかっていうことと裏表になると思ってしまして。江戸時代はどんな時代だったかと言いますと、200年間、自主独立」

水島「うん」

茂木「外国の軍隊、一人も居ません」

水島「うん」

茂木「軍事同盟も組んでいません」

水島「うん」

茂木「一回も侵略されず。食糧は完全自給です。100万都市、江戸の秩序。清潔さ。これらが保たれていた、世界でも類のない文明だったと見ておりまして」

水島「そうですね」

茂木「だから、私の本音は、もっともっと長く続いていて欲しかった」

水島「(笑)」

茂木「あれが、もし300年400年続いたら、どれだけの文明になっていたかと思うんですけども、まあ、それが成し得なかったのは、外圧だと思います」

水島「うん」

茂木「私は世界史の先生なので、当時の世界情勢っていうのをザックリ図解しましたので、こちらをご覧ください。アメリカは未だ弱小国家で、当時は圧倒的なイギリスでした」

水島「そうですね」

茂木「イギリスは世界中の植民地を、ほぼ独占してまして、イギリスに対抗し得る国が無かったので、イギリスの軍事力、イギリスの暴力による平和ということで、パクス・ブリタニカ(Pax Britannica)と言われました。そのパクス・ブリタニカの範囲ですけれども、イギリスが直接、軍隊を送って占領した、例えばアフリカとかインドとか東南アジアが大英帝国、British Empireと言いますが、その外に広がっているんですね」

水島「うん」

茂木「この外側っていうのは何かって言うと、別にイギリス軍は居ないんですけども、経済的にイギリスに従属している」

水島「うん」

茂木「イギリスのマーケットになっている。イギリスに一方的に投資されているということで、最近の言葉でね、これ、『非公式帝国』と言います」

水島「う〜ん…」

茂木「はい。例えば、ロシアとかオスマントルコとか清国とか、そして日本ですね。あとは中南米と世界の殆どがアメリカ、イギリスの経済支配を受けていた中で、抵抗していた国があります。それが、まずドイツ。ドイツはビスマルクっていう天才が出まして、ビスマルクは弱小国家だったドイツの国々を一個に纏めると同時に、経済統合しまして共通関税をかけて、イギリス商品をシャットアウトしました。

それからアメリカです。アメリカ合衆国は、実は中が割れてまして、イギリスの非公式帝国に入っちゃえばいいじゃないかと。我々が作った安い綿花を買って貰って、工業製品を買ってあげればいいんだっていう南部。いやいや、アメリカは独自の工業を打ち立てて、イギリスとバチバチやるんだっていう北部が割れてまして、これが結局、南北戦争になりました。

ですから、もし南部が勝っていたら、アメリカも完全にイギリスの勢力圏に飲み込まれて行ったということが判ります。これを止めたのがリンカーン大統領ですね。今日は、この辺の国の話をざっくりさせて戴きまして、じゃあ、オスマン帝国はイギリスにどう抗って結局、どう負けて行ったのかとか、じゃあ、それと日本の明治維新の何が違ったのかっていうところを見れば、明治維新に対する評価も、かなり変わって来ると思いますので、またあとで詳しくお話を致します」

水島「これは大変、興味深いですね。有難うございます。吉野さん、お願いします」

吉野「僕もねえ、どういう切り口でお話ししようかなあと思ったんですけども、今日は私なんかよりも色々な事が詳しい先生方の前と言うのも本当に恐縮ですけども、日本という国は、それこそ、ずうっと縄文時代から今日に至るまで侵略らしい侵略なんて受けたことが無いし、ずうっと1万、下手すると2万年近く、我々は日本人というか大和民族の国ですよ。」

それが初めて事実上のイギリスの侵略を、それこそアメリカの侵略を受けたっていうのが明治だったと思うんですけども、じゃあ、ヨーロッパはどうだったのかって考えると、ヨーロッパ大陸という所にヨーロッパ人が居たっていうことは、日本みたいに2万年前とか3万年前とかじゃなくて、その頃は氷河期ですからね。色々な人達がちよろちよろ入り出して来て、それで初めてローマ帝国というので統一した時には、人種もバラバラ、宗教もバラバラ、民族もバラバラ、哲学も理念もバラバラっていう所で、統一するっていうのをローマ皇帝っていうのは弱いので、象徴天皇みたいにキリスト教を入れて外人の宗教なのにやったっていうのがあって、それで、そのあとは恐らくヨーロッパの諸国っていうのは、その土地ですよ。」

水島「うん」

吉野「例えばドイツだったら寒い所だし、イギリスは海洋の国だし、フランスだったら農業が盛んであるという所で、それぞれの保守が出来ていたのにも拘わらず、1700年代ぐらいになると土地を持たないユダヤ人というのが入って来て、彼らが金融とか、それから売買ですとか、こういうもので市場というのを創って、全く違う価値観を、彼らが入れて来てしまったと。」

なので、僕は、これらの国々も表向きは、実はそれぞれの国があったんですけど、実際は、やっぱりドイツ、イギリス、フランス、オーストリア、イタリアのロスチャイルドの五つのグループが裏で操作をしていて、彼らも多分、こんなに金融とかはしなくなかったと思うんですよ。でも戦争というものがあつたりとか、それから独立があつたりとかする中に於いて、彼らが操作して来たのと同じことが、じゃあ、次は中国も行ったから日本も来るんだろうと言って来た時に、江戸の幕府側についているのがフランスのロスチャイルドで、新政府軍というか後の新政府になる方はイギリスが付いていたと。

どっちを取ったら日本が得だったのかというしか選択肢が無かったと思うんですよ。茂木先生がおっしゃるように、そのまま続いていけば、僕もいいなあと思えますけれども、やっぱり圧倒的に軍勢力がそこまで無かったと。270年近くの間、ずうっと鎖国をしていたお陰で、そういう力が無かったというのと、もう一つは多分、諜報活動というのが日本に無かったのが最大の欠点だと思うんですよ。

それで仕方がなく明治維新をせざるを得ないと。日本は多分、描かれたレール通りに開かれてしまった訳ですが、恐らく明治維新が素晴らしいと言っている人達は、昭和の戦後の時代に日本国憲法が素晴らしいんだと、主権が国民に移ったんだというのと同じように、明治維新が素晴らしいと言っていると思うんですよ。」

水島「なるほど」

吉野「だから騙されていると思うんですよ」

水島「構造的にそうだね」

吉野「うん。だけでも、じゃあ、他にどういう選択肢があったのかって考えると、やっぱりキツイですよ。例えばフランス側の方に乗っていたら多分、貿易とか、そんなにする国にはなっていなかっただろうから、恐らく工業ですよ」

水島「うん」

吉野「重工業をやるような国で、あまり貿易をしない国になってしまったかもしれませんが、イギリスは日本と似たような海洋国家だから、やはり、貿易をしてお金をぐるぐる回すという意味では、どうせ占領されるんだったら、どっちの方がマシだったかっていうことを考えたら、イギリスだったと。そして、茂木先生がおっしゃったように、イギリスは強い国だったということじゃないかと思っているんですね。だから、その後、この評価が全然、違う訳ですよ。こういう事実じゃなくて、あれは素晴らしいことだったんだと、美しい事だったんだと言っていることは、ちゃんと訂正しなきゃいけないと思っています。

あとでお話ししますけども、結局、宗教が違ったり民族が違ったり、人種が違ったりとか歴史が違ったりするとかっていう方法で、一つの方法は金融で統一するという方法がありますよね。そこに宗教とかが無い訳ですよ。ですから秩序は金だというやり方もある訳ですけども、もう一個は、以前もお話ししましたが、ペストだとかコレラの流行があって医療で統一しようというのが、実は、この金融より先にあったんですよ」

水島「うん」

吉野「それはペリーが来た時もそうですけど、検疫制度というのを入れようということ、それが最終的に現在のワクチン注射に繋がっている、支配ですよ。でも、これが裏の支配の構造というのは誰も全然、言わないし、知られていないと。だから、こっち側からも切り込んでいく必要があるという風に思っています」

水島「そうですね」

吉野「(頷く)」

水島「はい。有難うございます。では、宇山さん、お願いします」

宇山「はい。最初に断っておきますけれども、私は大阪生まれ、大阪人ですけどもね、しかし両親共に長州人な訳ですよ。ですから私は、血統の上では純粋な長州人ということになりますから、長州の人達を肯定するんですね。今日は皆さんからぶっ叩かれるかもしれませんが」

一同「(笑)」

宇山「私は明治維新を全面的に肯定致します」

水島「はい」

宇山「世界を見渡しても、明治維新ほど素晴らしい近代革命は無かったという視点で、お話をさせて戴きたいんですが」

水島「うん、うん」

宇山「まず、この世界史というところから見た場合、この明治の近代革命が、その他の国々と決定的に違うのは、何かというところを纏めました。ヨーロッパ型というのは、王侯・貴族・地主などの特権階級から、ブルジョワ市民階級が権力を移譲されて行った訳ですよ。ところが日本は、従来の特権階級であったところの藩主や武士達が、自らこれを担ったということが決定的に違うんだと思うんですよ。

このヨーロッパの市民革命というのは、この特権貴族が捕まえられてギロチンにかけられて、そして処刑をされる寸前まで悪態をついて、どうして俺達にこんなことをするんだと

言って、いやいや殺されていったという血みどろの歴史ですよ。フランス革命なんて正にそうですね。ところが日本の明治維新で、殆ど血が流れていないんですね。確かに、新政府軍が会津の人達をぶち殺したというような血生臭いことはありましたが、ヨーロッパの虐殺、殺戮と比べたら、これはレベルが全然、違うという点では、この明治維新というのは可能な限り、考えられ得る限り、平和裏に体制が移行していった素晴らしい近代革命だと。世界史の中の奇跡だとすら、私は考える訳です。

じゃあ、どうして、こういうことが可能だったのかということを考えた場合、先程、富岡先生もおっしゃいましたけれども、やっぱり天皇陛下のご存在というのが大きかったと思います。例えば徳川慶喜が大政奉還ということを行いますね。それは天皇に自ら預かった大権をお返しするということで、この大政奉還をする訳です。これは別に薩摩や長州の足軽上がりの小武士達に言われて、大政奉還をした訳じゃないです。天皇という超越的な存在があって、その超越的な存在に対して権限をお返しするという、この建て前を通すことが出来たからこそ、この江戸幕府というものが、スムーズな形で終わりを告げられるという形になったんだろうと思います。

もしも薩摩の足軽達に屈服させられるというようなことになったら、それは徳川慶喜だって屈服しませんよ。やはり最後まで血みどろの争いをしていたという風に思います。天皇陛下のご存在があったということが、極めて大きな出来事であったと思います」

水島「うん」

宇山「まあ、こういう風に、実は慶喜だけじゃなくて、藩のお殿様達も自らの特権を手放していく訳です。大政奉還と同様に、廃藩置県というのがありました。藩主達が自らの特権を手放して、そして自らが持っていた軍隊を公の軍、公軍、国家の軍とするということを認めて、一致団結をしていくということを認めるということは、世界史を見渡しても、このように特権階級が自分で自分の特権を手放して、そして新しい国家を創る等というようなことは一切しておりません。

先程から言うように、フランス革命の特権貴族達は、死ぬまで、殺されるまで悪態をついて、俺達にこんなことをしたらお前達、酷い目に遭うぞおというようなことで、わあわあ言いながら殺されていった訳です。しかし、日本の藩のお殿様達は、自ら特権を手放していったというのは大変、凄い事だろうと思います。この2千年の世界史の中で、こういう歴史というのは無いと思います。

ただ、一方で薩摩や長州が強大な幕府に打ち勝つことが出来たということの理由を、最近では、こういう言われ方もある訳です。天皇の大権を悪用したんだと。明治天皇を利用して担ぎ上げるというようなことをして、旗頭にして戦ったからだ。卑怯なやり方を執ったのだというような説がありますが、実は明治天皇は自ら薩摩や長州と共に連携をしていこうということを、元々考えていたという部分があるんです。

何も薩摩や長州に踊らされて、こういうことをやったのでは無いという点が重要だと思います。明治天皇の祖父に当たるのが、中山忠能というお公家さんだった訳です。明治天皇の生母の父になる訳ですが、この中山忠能が尊王攘夷論を唱えて討幕派だった訳です。幕府はけしからんということで、ずっと動いており、そして、この人は、特に長州藩と連携をしていくということを、ずっとやっておりました。王政復古の大号令の時には、明治天皇が既に長州と連携していこうということの御決心を固めておられたのですね。

別に、この長州に踊らされて、旗頭に担ぎ上げられたという訳じゃありません。明治天皇も、この長州と共に近代化ということの必要性を幼少の頃から教えられており、その必要性を理解しておられたということが、非常に重要な点だろうと思います。それから、もう一点。この明治維新を否定するということが、最近の保守の中でも一つの大きなムーブメ

ントになっておりますけれども、その明治維新の否定的な側面ということを考えて場合、やっぱり、こういうことが挙げられると思うんですね。私は明治維新の否定的な側面も認めます。例えばイギリスのジャーディン・マセソン商会。アヘン貿易の会社でございますけれども、そのジャーディン・マセソン商会が長州五傑、伊藤博文とか井上馨等を支援して、若い頃に留学をさせたということがある訳です。そして、このロンドンで伊藤博文や井上馨が一体、どういうことを吹き込まれたのか。何か思想的な感化を受けて、そして大英帝国の真似を次々としていく訳ですね。

伊藤博文は特にそうです。まあ、これでマインドコントロールを受けたんだらうと。長州の奴らというのは結局、国を売り渡したグローバリストだ、けしからんっという根拠は、やっぱり、こういうところにある訳ですね」

水島「うん」

宇山「坂本竜馬も英雄じゃないという捉え方というのは、イギリスのアヘンの密貿易会社なんかとつるんでいたという側面はあると思うんですが、あまり、これを拡大、誇張して言うべきじゃないと思うんです。やっぱり、それは確かにロンドンで色々な洗脳工作を受けた影響はあるでしょうけれどもね、しかし、やっぱり、この伊藤博文というのは、自ら日本の国益の為に大日本帝国憲法というものを作り、皇統というものの大切さということを出していったということを考えれば、何が何でも長州の奴らがテロリストだという話では決して無いんだらうと思います。

そして、このトーマス・ブレイク・グラバーの存在も、所謂、この薩長の連中ってというのは、けしからんということの一つの根拠にされる訳です。確かにグラバーというのは、武器の密貿易なんかを薩摩と長州と、ずう～っとやっていったところの中で、薩摩と長州が近代武装化していくということがありました。そして、この坂本竜馬にも、このグラバーが支援を与えていった。このグラバーが大英帝国の手先だと。だから、この明治維新というのは、イギリスの思惑通りに事が進んだというような話があるけれども、しかし、これもグラバーとの接点だけを誇張して、長州の奴らがテロリストという話にはならないと思います。

実際、このグラバーというのは、イギリス本国への報告にも、彼は勝手な行動ばかりしていると言って、イギリス海軍が本国に報告しているんですよ。あいつを何とかアジアから追い出して欲しいというように、イギリス海軍が要請をしているということからも解るように、別にグラバーがイギリス本国の手下になって何でもかんでも日本を操っていたというのは、陰謀論に過ぎないというように思います。

確かにイギリスの、グラバー達から助力を得たということはあるかも知れないけれども、あまり、その部分だけを大きく捉えて、日本の近代化を貶める必要ってというのが無いのではないかなという風に思います。以上です」

水島「なるほど。いやいや（笑）宇山さん、でもね、一つだけ」

宇山「はい」

水島「みんな、そんな風に思っていないから、長州はテロリストだと言っている人も一部には居るけどね（笑）」

宇山「はい、そうですね（笑）」

水島「それは全員でも大部分でもないからね（笑）」

宇山「私は、しょっちゅう長州のテロリストの子孫かというようなことで…」

一同「（笑）」

宇山「言われるんですけど（苦笑）」

水島「まあ、色々な問題を提起して貰ったと思います。今、明治維新の問題の否定的とい

うか、つまり今の現代の日本のね、戦後の日本まで、ある種、繋がって、そこからスタートしているところもあるんじゃないかと。明治維新自体のそういう具体的なことは別としてね。自分達が引き受けた西欧とか、或いは、捨てた日本とか、そういうところが今、現代の日本にも繋がっているんじゃないかっていうね。

こういうような感じがあるのと、おっしゃるように、まあ、私なんかは、ある種、『国譲り』だと思います。古事記の『国譲り』という概念も、やっぱり入れてもいいかなあって思っているぐらいです。勿論、古事記の『国譲り』はね、実際は自分から申し出たっていうことになっているけども、実際は多分、戦いがあるって、でも相手を滅ぼさないで、出雲大社をちゃんと残してというね。こういったものだと思いますからね。

そういう意味で、我が国が西洋的なものと違うのは、カルタゴとか、ああいう絶滅させるっていう感覚。民族浄化みたいなことじゃなくて、ある種の戦いはあるけども『国譲り』っていうかね。戦国でも豊臣でも織田、織田信長は直ぐ焼き殺して言われるけど、それでも、ずうっと繋がっているみたいな感じがあるので、いや（笑）物凄く長州愛があるっていうことは、よく解ったし、やっぱり、それは大事なことでね」

宇山「はい」

水島「そういうことで、また細かく具体的に（笑）、ええ、日本全体が長州をテロリストとは思っていないというね」

宇山「そうですね（笑）」

一同「（笑）」

水島「はい。有難うございます。では、大場さん、お願いします」

大場「はい。今、宇山先生の方から長州の話がありました。僕の場合は、高祖父母が全部ですな、仙台藩、仙台藩、盛岡藩、桑名藩というような話で、という具合ですが（笑）」

水島「（笑）」

一同「（笑）」

大場「まあ、それとは関係なく江戸の思想、特に朱子学や陽明学の研究者として申し上げたいのが、日本史を見た時にどうしても明治維新が必要だった論拠として、江戸時代というのは身分制が非常に激しくて、朱子学によって非常にガチガチな身分差別が行われて、規範というのが非常に厳しく、とにかく何か暗い時代だったと。まあ、特に昔の日本史の授業では、こういう風に言われることが多かったですね」

水島「そうでしたね」

大場「しかしながら、実際には、そうした士農工商のような厳しい身分差別っていうのは、実は無かったというのが現在では歴史の方では、有力となっております。また朱子学に関しましても、こちらは、どうしても唯物史観の影響がありまして、本当の朱子学というのは別に、そのような身分統制をする為の学問ではなく、基本的には物事には、すべからず物理と倫理があるんだと」

水島「うんうん、うん」

大場「つまり端的に言えば、鉄砲なんていうのは物理で、引き金を引けば火薬が爆発して弾が飛んで行く訳ですから、孔子だろうが、その辺の罪人だろうが、みんな、同じく死ぬんですけど、ただ、それをどう扱うかっていう倫理が合わさって、初めて物事の正しい在り方、理というのが出現するのだと。端的に言えば朱子学っていうのは、そういう学問で、それが日本に入ってきたことによって何が起こったかと言うと、我々は今、この社会というものを、どのように創っていくかって考えた時に、出来る物理的な合理性と、そこで日本人が全員、お互いの職業を通じて支え合って、同じ日本という国を創っていくんだという国家観ですね。これが倫理の部分になりますが、それが一つ、日本人の目的となっ

て行った。

それを徳川家康が、最初に藤原惺窩（せいこ）や林羅山という朱子学者と協力して、国家の国是とし、そして新井白石であるとか松平定信という人々を経て行って、様々な制度としても展開して行きます。例えば、世界初の国民年金制度というものを作ったのは、それこそ会津藩の保科正之ですし、或いは、国債を発行するという国債の制度ですね、あの原型を作ったのは松平定信ですし、或いは定信の系統から、所謂、ブンド法と呼ばれる日本国民一人一人が資産から天引き貯金をして貯蓄をし、それを資産運用することによって、一人一人の貯蓄額を上げて、それをベースとして大規模な工業化であるとか地域の再生を図ろうとしたのが二宮尊徳ですけれども。そこから、更に千葉には、大原幽学という学者が出て来て、世界初の農業協同組合を創ったと」

水島「うん」

大場「こういう形で、朱子学というのは単に観念的な議論をするのではなく、物理を徹底的に突き詰め、社会全体の倫理というものに合致させていく過程で、非常に西洋に劣らないシステムというのを生み出して来た。これが江戸時代の正確な姿であろうという風に思います。その証左と致しまして、例えば、松平定信は黒船が来港して来る50年前の段階で既に、これから3~40年後には恐らくヨーロッパが来ると。その時に備えて、朱子学の知識によって要衝を全て解析せよという命令を、昌平坂学問所の方に出しておりますから、結局、黒船が来た時ってというのは、応接に当たったのが林大学頭（はやしだいがくのかみ）ですけれども、林大学はペリーが国際法を持ち出した時に、実は、その国際法というものも既に知っていて、その理ってというのは何だと。あくまで西洋人の言っている正しさ、国際正義であって、人としての正しさではないだろうと言って、ペリーを絶句させている。

その結果、その後の日米修好通商条約に関しても20%の関税率という、これは植民地の関税率としては全くあり得ないぐらいの高関税率を設定することに成功している。大体、ベルギーと同じぐらいですね」

水島「うーん」

大場「そして日本初の商社を創るとか製鉄所を造った。これは定信が創っておいた昌平坂学問所で学んだ幕府官僚達が、日本初の商社であるとか製鉄所を造った。ご存じの通り、横須賀の製鉄所は、その後、日露戦争に於いて活躍した軍艦を製造しているということで近代化の物理的ベースとなっているものが朱子学であったと。或いは江戸時代だったと。また、これに比例して、ヨーロッパがやって来た時に脅威となるのは何かということが議論になった時に、これは朱子学に限らず水戸学でもそうですけれども、要するに儒教全般が、ヨーロッパは物理的な軍艦や大砲、鉄道という文明によって日本を圧迫しているが、もう一つ倫理の部分で、西洋人の考えるキリスト教であるとか、或いは、民主主義のようなもので、日本人は間違っていると。これが世界普遍の考え方だから、お前達はこっちに來いという風に絶対に言って来るので、予めそれに備えておく必要がある。

その場合、日本はどういう国かと言うと『人倫と倫理の国』だと。即ち我々は、神に命令されたから、神への信仰の証立てをする為に人に対して優しくしたりするのではないと。或いは民主主義で人権というものが保障されているから、人の安全を保障するのではない。我々は同じ日本人同士で、それぞれ親は親らしく子供は子供らしくと、皆が、その『らしさ』というものを発揮して、初めてお互いに背中を預けて安心できるっていう関係性の中で、何をしたらいいのか。

そして社会はどうあるかっていうことを考える、そういう『人倫と倫理の国』だということとで対抗しようと。文明戦に勝つんだと。こういう風に言った訳ですね。ここが一番の勘

所で、即ち明治維新というものが西洋化に邁進して、こちらが正しかったと言う為には、江戸時代は暗黒時代でこんなことを考えていちゃ駄目な訳ですよ」

一同「(失笑)」

大場「逆を言えば、江戸時代っていうものが、そういう風な思想を準備していたからこそ、先程、最初に申し上げた様な、江戸時代は暗黒で、朱子学はとんでもない思想であり、それを全部、四民平等にして天皇の下に日本人が集まって、ある種のナショナリズムを形成したから日本は近代化できたんだと。自ら進んで後進国であったということを、歴史を作ることによって、ある種、明治維新を正当化しようとしたと」

水島「うん」

大場「その結果として、所謂、西洋化というのが起こり、結局、第二次大戦後、大東亜戦争に敗北した時と同じように、日本という国は遅れていたのだと」

水島「そうですね」

大場「だからアメリカによって民主化されたので、我々はむしろ進んでするんだと。同じ構造が起こっている訳ですね」

水島「うん」

大場「即ち私の立場としては、明治維新というのは、正に、このタイトルにある通り、近代グローバリズム、或いは、西洋化というものに日本が順応化していった過程に於いて、日本という国が溶けていく、無くなっていくと。こういう問題を孕んでいるということに注目すべきなのではないかという風に思っております」

水島「そうですね。はい、そのところが、大事なところだと思いますねえ。まあ、時代劇などでもね、前にも言ったことがありますけど、江戸時代の何か同心の数が三百数十人だったっていうね。つまり100万人都市で、勿論、岡っ引きというのは下に5人とか何人か居たけども、三百何十人っていうのは物凄く治安がいいっていう感じになる訳ですよ。だから時代劇を観ると、泥棒や何かが物凄く居るようだけど、恐らくこんな所は世界に無かったでしょうねえ。

そういう時代だったのが、明治維新になって行くってことです。はい、有難うございます。じゃあ、稲垣さん、お願いします」

稲垣「はい、宜しく申し上げます。私の立場は、ちょっと宇山さんに近いんですけども、まあ、私は薩摩出身ではないんですけども、西郷隆盛に大変、関心を持って、薩摩藩中心の明治維新史を調べてみました。30代の時に西郷隆盛を徹底的に調べてみようと思っただけで、維新三傑と呼ばれる大久保利通、木戸孝允の中でも西郷隆盛を研究しようと思ったかと言うと、自分の本にも書きましたけど、例えば色んな知識人が、まさしく、日本を体現する存在として、西郷隆盛について触れている訳です。

例えば、明治時代のクリスチャンである内村鑑三は、維新革命に於ける西郷の役割を充分に消そうすれば、革命の全史を帰すことになると。維新革命は西郷の革命であったと称してよいと思われまうという形で、代表的日本人の中で確か筆頭に表現していたと思います。まあ、そういった形で言われていると。そして、その内村鑑三の弟子筋に当たる山本七平という人が居ますけども、この方が『日本人とユダヤ人』という本の中で、イザヤ・ベンダサン名義で書いた本の中で、西郷隆盛を『日本教の聖人』、セイントであると。まあ、ラビであるという表現をしていた。

保守の言論人の中でも、例えば、三島由紀夫さんは『銅像との対話』というエッセイの中で、西郷隆盛の心の美しさということを言って、それは日本人の最も危険な部分でもあると。西郷隆盛の心の美しさを認めた時、我々は西洋的、近代的な知性というものを否定せざるを得なくなるだろうと。晩年にそういうことを書いていると。

江藤淳は『南洲残影』という有名な本を書いて、この中で西郷南洲という強力な思想ということを書いていて、それを受けて文明史家の中西輝政氏は、日本の神髓を本当に体現する人物だと言われている、一体、どういう人物なんだろうということで、西郷隆盛を徹底的に調べてみる気になった訳です。

最近、色んなところから明治維新に対する否定的な論が出ていて、特に『グローバリストの傀儡だった明治政府』といったことが、いっぱい言われています。でも、僕は今、これまで大東亜戦争について自虐史観という形でやられて来たことが、明治維新に向けられているんだろと思っていて、ある意味、フランクフルト学派的に歴史、文化否定ですね。そういった形でのプロパガンダが今、明治維新に仕掛けられていると思いますので、しっかりと思想的背景まで含めて、日本人として、しっかりと明治維新を見ないといけないんじゃないかと思っています」

水島「なるほど」

稲垣「それで明治維新に関してですが、何処までを明治維新として捉えるのかっていうので、一つ方向が定まった事件として、やはり征韓論破裂から西南戦争を克明に調べた結果として、それが一つの明治維新としての区切りだったんじゃないかと、私はそのように考えている訳です。有名な解り易い話で象徴的な事件として言いますと、維新三傑の中で西郷と大久保は盟友として明治維新、特に明治維新というのは、征韓論破裂ぐらい迄は、俗に言いますけど、薩摩が主で長州は従という形で、本当に王政復古から進められていた訳です。

そういった中で、西郷と大久保が喧嘩をする訳です。大久保利通が西洋を見て来て帰って来た時に、西郷隆盛と仲違いする訳ですけども、これは西郷南洲遺訓の中に、次のような話としてある訳です。西郷隆盛が文明というのは『道』が、あまねく行われることを称賛して言う言葉だと。そういう風に言っている。だから、別に文明の利器とか、そういうことじゃなくて『道』という価値規範が行われていることが文明だということを言って、ある人と喧嘩をしたと。

自分が『西洋は野蛮じゃ』と言ったら、ある人は『西洋は文明じゃ』と言って喧嘩になったと。最終的に西郷さんが、本当に文明だったら無知蒙昧の国に対して、こんこんと説諭して解明に導くべきなのに、とにかく全て自分達が強いのをいいことに、搾取するようなことをするのは野蛮でしか無いって言ったら、ある人は黙ったと。

これは西郷隆盛の付き人だった高島鞆之助（とものすけ）という軍人が居るんですけど、この人が、西郷さんは西洋から帰ってきた大久保邸を本当に足しげく通って向こうの話を聞いていたんだけど、ある時、喧嘩が始まったと。喧嘩が終わって、西郷隆盛は怒ってすっくと立ち上がって出て行ったんだけど、外に出てから、あそこに出ていた茶菓子のカステラが美味しそうだったから、ちょっと取って来てくれと言ったという子供のような無邪気なところもある人だったという談話を言っているんですけど、これが見事に時期的にも合致する話で、恐らく大久保との喧嘩だったと思うんですね。

実際に調べてみると、大久保利通は外遊するまで、王政復古から廃藩置県まで、それが終結だったという風に捉えていたんですけども、彼は、それまでは論語の『過ぎたるは猶、及ばざるが如し』をもじって『過ぎたるは猶、及ばざるに如かず』と言って、まあ、やり過ぎは良くないと、やり過ぎなければ、あとで修正する事も可能だっていう立場だったんですけど、西洋へ行ってから大久保利通は、もう文明の格差に圧倒されてしまって、本当にイギリスは文明だっていう風になってしまい、これで考えが変わってしまって、とにかく取り込めるだけ西洋文明を取り込んで、あとは後輩の頭のいい人に整理して貰おうという風に木戸孝允に語って、木戸孝允がこれに対して不満を漏らす手紙を書いているん

です。

要するに、そういった形で大久保利通は考えを変えてしまって、とにかく欧化主義になってしまったと。最終的に征韓論破裂で、明治政府の中心人物になることによって、恐らく、方向性が決まってしまった。それが武士の反乱になって西南戦争になるんですけれども、最終的に西郷と士族達は敗れる訳です。

実を言うと、これに刺激を受けたのが明治大帝でした。明治大帝は、それまで統帥、元帥として乗馬を凄く好んでやられていたんですけど、ここで、ぱったりと乗馬をやめて明治政府の政務を拒否する様になる訳ですね。そこから段々明治政府の今の在り方っていうのに懐疑的になって、段々天皇神聖論者で固めていた士族であるとか侍補の、佐々木高之とか、或いは、元田永孚（もとだ ながざね）といった、後に『教育勅語』を書く人達を大事にして、最終的には日本の本来の姿を、ちゃんと取り戻さないといけないということで、明治憲法の時にも、これだけでは足りないということで『教育勅語』を元田永孚と井上毅に起草させる流れがある中で、日本もそういった自己喪失の葛藤を抱えながら、最終的には、大東亜戦争という形で戦いに挑んでいくという大きな流れがあるので、そこに至る西郷隆盛に象徴される、或いは、外遊するまでの大久保の背骨になっていた思想までを考えた時、やはり日本人は彼らの言いなりになった訳じゃなくて、日本を守る為に、彼らがこっちを利用したように、こっちも彼らを利用したんだといった構えというか、そういった我々の先人達の国難に対し処していった態度ということこそ、今、私達は学ばないじゃないかっていう風に今、考えています」

水島「なるほどね。はい。有難うございます。丁度、今、言った『南洲残影』という中で非常に一つだけ、よく覚えているのは、大東亜戦争は世界に対する西南戦争だったという、中々恰好いいコピーっていうかね、でも本質的なものもあるっていう、江藤淳を結構、読んでいるんだけど、あまり好きじゃないけども、でも、この本だけは結構、感心したっていうかね、いや、ある種のプロテストっていうかね。

それから今、稲垣さんが言ってくれましたけど、つまり西郷が立ち上がって滅びなきゃいけないかっていうね、これが明治維新の中の一つの要素でね、やっぱり、そのところで、私が喪失感って言うか、いつか何か失われたものがあるんじゃないかっていう意識をする、実は、今日、言いたいのは、人種差別の事です。

例えば、アメリカの収容所に入れられたとか、大東亜戦争とかの歴史をずっと見ると、日本人が移民をしたところから、今、言われているアフリカのアパルトヘイト以上にガンガンやられているんですね。実は、今回、アメリカへ取材に行こうと思っています。東京裁判も南京…ああ、これを言うと YouTube で直ぐバンされるので言いませんけど、南京の、所謂、虐殺と言われる事を否定するとバンですよ。だから言いませんけども（失笑）南京事件と言っておきますけど、南京事件みたいな言い方も、実はベースにそれが物凄くあったんじゃないか。このことを凄くねえ…」

富岡「日本人に対する」

水島「日本人に対する」

富岡「ああ」

水島「我々は意外と、そう思っていないけども、私はアメリカに相当、ドラマや映画とかロケに行っているのを感じるんだけど、あの時代でも、私が丁度1968年に大学に入った訳ですけど、その時でも、やっと公民権でしょ。それで、あの牧師ね」

富岡「キング牧師」

水島「キング牧師が暗殺されたとかね、アラバマ州の大変なこととか色んなことがあって黒人差別っていうのは勿論、あったけど、実はそういうのがあって、よく茂木さんがね、

言ってくれるパリ条約のね、ワシントン会議ですか。ああいうところの軍備の配分とかいうのだけじゃなくて、我々がパリでやったのは人種の平等っていうのを打ち出そうと言ったら、アメリカとか、みんなが寄って集って潰しちゃった。こういうようなことを含めると、本当は歴史の中で、我々が明治維新を迎えて、西洋の色々な列強と対峙しなきゃいけないかった。

江戸時代って意外と侍が特権階級って、おっしゃっていたので、そこだけ、あとで確認したいのは、一番、上のクラスだけれども、実は貧乏でね（笑）、結構、商人が裕福で、つまり、こんな国は、あまり無かったんじゃないかって。政治権力は一応、持っているけども、金とか何か全部、言うことを聞かなきゃいけない。貧乏だったっていうね。西洋の場合、権力者はみんな、お金持ち。皇室もそうですけどねえ、こういう特異な国で…権力を持ったら、みんな、金を持っているって訳じゃないことを含めると、やっぱり、この明治維新の中で問題なのは…、実は、最近、これだけ、ちょっと言わせて下さいね。

最近、私はソニー・タン（Sony Thang）というベトナムの評論家のXをよく見る訳ですよ。これは最近、評判になりつつあるので紹介したいんです。ああ、知っていますか」

富岡「聞いたことがあります」

水島「うん。これねえ、ベトナム人だけど大変、善い事を言っているのね。例えば、ある視聴者から質問で、ギリシャは『民主主義』及び『どのように統治されるかを投票で決める権利』を“発明”したと。中国には、そういう制度は一度も存在しない。そして他のあらゆる発明と同様、これにも長所と短所があるが、やっぱり、そういう『民主主義』っていう制度はいいじゃないかっていう質問に答えているんですね。

『君は発明と広告を混同している』と。『アテネが発明したのは「民主主義」ではない。それは奴隷・女性・外国人を支配する少数の男達による限定的な市民権制度だった。多数派は排除され、少数派はそれを維持する為に投票していた。それは民主主義ではない。奴隷所有者の株主総会だ』。最近、これをガンガン言うようになった訳ですよ。つまり『奴隷所有者の株主総会』だと。

それと、もう一つ言っているのは西欧の発明の事。これは皆さんが言ってくれたことと関わるんですけど、『ヨーロッパは、それで植民地主義、奴隷制、アパルトヘイト、そして、二度目の世界大戦に投票した。それは「文明化」の名の下に、鞭と爆弾で他者を教化する権利への投票でもあった。』というね。『民主主義とは投票の行為ではない。投票によって誰が苦しむのかを記憶する行為である』。まあ、皮肉で言っているんですけど。『君たちは、それをギリシャの発明と呼ぶが、それは形を倫理と取り違えているに過ぎない。君たちは議会を立てながら民族を消し去った』。君達はヨーロッパのことね。『我々は、君達に耐えながら生き延びる術を築いた』。ベトナムはそう言っているって言うんですよ。

俺達は、別にアメリカが消えた訳じゃないと。ベトナム戦争に勝ったけど。『中国が発明したのは民主主義ではない。それは**継続性（continuity）**だ』と。『皇帝を超えて存続する文明が選挙すら超えられない文明から説教を受ける必要はない』と。『だから確かにギリシャは世界に「民主主義」という言葉を与えた。だがアジアは、その言葉に意味を与えるための忍耐を世界に与えたのだ』と。

継続と発明って、所謂、ヨーロッパの空間の充実や拡大、そういう近代のことと、時間を持って継続するというアジアのそういうところの違いというのは、この明治維新にも、その辺のところも本質としてあるんじゃないかなと思っているので、皆さんに冒頭に、こういう人が最近、冴えていると言うかガンガン言っているので紹介しておきたいと思いました。

今、皆さんにお話し戴いたんですけども、儒教のことですがね、私も冒頭に言ったんです

けれども、皇室の祭祀に限って言ったのは、所謂、皇室の祭祀で間違いなく聖徳太子以来の仏教というものの、聖武天皇や桓武天皇も含めて敬虔な仏教徒と同時に神道も、まあ、神道をどう捉えるか分かんないけど、世界観としての神道。そして、哲学、世界の論理的な説明。そして朱子学、まあ、儒学って言うてもいいんでしょうけども、朱子学の、所謂、どう、きちんと生きるか。

さっき言った実利的な面も、具体的に How To というか、どうやったら生きられるのか。この3点セットが物凄く強かったんじゃないかと。先程、茂木さんにおっしゃって戴いた江戸の町人の中にも武士道とか言われるものとか、ちゃんと行き渡っていたということを考えると、この3点があったからこそ、下のクラスの士農工商の一番下がお金持で、力を持って、結構、自由にやれたということですけど、この儒教が無くなった影響というのは、やはり明治維新であると思いますか。大場さん、いかがですか」

大場「それはあると思いますね。天皇の祭祀に関しましては、おっしゃる通り唐式、即ち隋唐の唐と書きますが、唐式の儀礼というのは全て廃止になっていますけれども、まあ、我々はご存じの通り、例えば、神社参拝する時には、左足から前に進めて階段は片足ずつ上げて行くとか、そういったもの、悉く礼記という儒教の経書から取られている作法であると。これを形とするならば、今度は、形によって表す心は何かということになりますと、あくまでも統治者は、天の意志を受けて万民の生活というものを安泰に導く、或いは、それを祈るということが一番の皇帝なり天皇の仕事になるのです。

そして、その天こそは、日本に於いては天照大神であるという対応関係が思想的に行われました。その結果、江戸時代に於いては、大政委任論と言われるんですけれども、要するに天皇が天照大神から授かった統治の権限を将軍に対して委任することによって、その神の意志というものを遂行するのであると」

水島「うん」

大場「この段階に於いて、天皇の意味というのは、あくまで日本国民全体の象徴ということに集約されていて、政治権力者としての意味は実質的に失うんですね」

水島「うん」

大場「ただ、であるが故に、天皇は生々しい政治的な責任というものを被ることなく、いつまでも全ての国民に啓行される存在になるのであると。基本的に儒教が天皇或いは皇室、祭祀に対して、最も影響を及ぼした部分であると。そうすると、天皇も百姓や町人や武士と同じように、役割分担によってお互いに人民の中で倫理をつくっていきましようという内の一人になる訳ですね。

こうした考え方が、それこそ明治維新によって、天皇が統治大権を持ち、統帥権も持ち、そして一君万民ということで、全ての人間は必ず何処かのコミュニティなり職業に所属する事で自己を確認していた訳ですが、それを全部、取っ払ってしまって、日本人という実に白紙の状態で、天皇の下に一気に集結して国難を乗り越えて行くんだと。まあ、こういう思想に転換してしまう時に、どうしても祭祀にしても、いささか神秘主義的など言いますか、意味が解らないと」

水島「うん」

大場「或いは、儀礼的に過ぎるといったようなものに変化して行きますので、そうすると、例えば、現代の様に果たして天皇陛下がご高齢なのに、こんな儀礼が必要なのかという問いかけが、所謂、近代主義者やグローバリストから出て来た時に応えることが出来なくなっちゃうんですね。そういった問題というのは、明確にあると思います」

水島「うん」

富岡「あのう、ちょっと、いいですか」

水島「はい、どうぞ」

富岡「今、大場先生がおっしゃったことは非常に興味深くて、私は『教育勅語』が、まあ大日本帝国憲法もそうですけど、天皇に統治権を与える。実は『教育勅語』も最小の草稿を書いたのは中村正直という人ですね。この人は元々儒学者であって、それからイギリスに留学して、あのサミュエル・スマイルズの翻訳『西国立志編』というのが当時、非常に青年に読まれた。実は、彼が教育勅語の最初の草稿を書いているんですけども、そこで中村が書いた草案には『天』という、今、おっしゃった朱子学的、儒教学的な『天』という言葉が非常に多く用いられていたんですね。

これは、例えばキリスト教で言えば超越的な神ですね。それが実際の教育勅語から、この『天』の観念が徹底的に排除されたと。具体的には、中村草案が廃止となって、井上毅と元田永孚によって書かれて、だから、ある意味、この辺りから…」

大場「うん」

富岡「現人神と後に出てくるような、つまり天皇本人が神であるという考え方ですね」

水島「うん」

富岡「本来ならば、これは神皇正統記もそうだと思うんですが、天皇は尊い存在であるけれども、その上に超越的な『天』という価値があって、これは決して中国的な易姓革命では無いんですけども、そういう観念があったのが、やはり急速に国民国家を創り、急速的に強い中央集権国家を創る為に、やっぱり天皇という存在に物凄く色々なものを集約させてしまったっていう、正に山本七平が『現人神の創作者たち』で書いているんですけども、やはりね、そこに、私は非常に大きな問題があったのかなと思うんですね」

大場「いや、全くおっしゃる通りだと思います」

富岡「うんうん。この世論をね、だから教育勅語の内容はいいんですよ。森友学園で、子供達が、みんな、やってもいいと思うんですけど（笑）」

一同「（笑）」

水島「それって出しちゃまずいでしょ」

富岡「まずいですか（苦笑）。まあ勅語はいいんだけど」

水島「森友関係ないんだから（笑）」

富岡「やはり歴史的に、教育勅語の中にも象徴されるような『天』の観念の削除、つまり、そこにある皇室が一つの崇拜の対象であり、倫理的価値の源泉であるという風な形になっていったところにね」

大場「うん」

富岡「これは明治国家体制と天皇体制の非常に微妙な問題があるんじゃないかなと思うんですね」

水島「なるほど」

大場「うん」

水島「そこですよ」

富岡「うん」

水島「間も無く『憂国記』がありますけど」

富岡「うん」

水島「あの三島由紀夫という人が、ある種の現人神論だからね」

富岡「いや、三島さんは、ただ現人神というよりは、むしろ、今は古代的な天皇ではない存在という感じですよ」

水島「そう、それはそうだけど、いやいや…」

富岡「ゾルゲとしての天皇」

水島「現実の問題として、そういう存在が、もうちょっと解り易く言うと、人間になってしまわれたのかっていうね」

富岡「勿論そうです」

水島「そうやっているじゃないですか」

富岡「はい」

水島「そういうようなことで言うと、それとは違う意味なんだけど、やっぱりさっき言ったように、まあ、私なんかだけでも、神々の血筋を引かれた大神主様というね、大祭司というのが、基本的な日本の歴史の中にずっとあったものじゃないかと。あの建武の中興とか古代の壬申の乱とか色々あるけれども、現実的な問題としては、基本的に天皇というのは、そういう存在でずっと来られたんじゃないかなと。

ただ明治天皇が、やっぱり、やらなきゃいけなかった、或いは、必然だったかも分からない。これは意見があると思うんですけども、やはり統帥権の問題が最後に出て来るっていうね。現実の問題は戦争が起きて来たりとかね、或いは、戦争が近くなったりすると、誰が一体、日本の国の戦いとかね、実際、軍隊を扱うのか、政府が扱えないっていうようになっているじゃないですか。

富岡「そこは物凄く明治の国家の創る人達が…」

水島「矛盾のところだよな」

富岡「悩んで、悩んで。今日、持って来たのは、明治11年に出した『米欧回覧実記』という有名な本がありますね。これは岩倉使節団の久米邦武という人が行った記録ですよ。僕はずっと、これを大学で講義をしていて、あまり自分でやって面白い講義って無いですけど（失笑）、この講義だけは自分でやっていて面白い講義です」

一同「（笑）」

富岡「これは唯一、本当に面白い内容で、学生に、これは面白いからって」

水島「はい」

富岡「喋っている自分が面白いから面白いんだって言っているんですけどね」

水島「うん」

富岡「これはね、要するに岩倉特命全権大使が、ご存じのように明治4年12月に横浜を出て、アメリカ合衆国、それからヨーロッパと全てを周るんですよ。津田梅子さんは、向こうに6歳で行って、そのままアメリカに居るんですけど、メンバーとしては大久保、木戸、伊藤達が居て、まず、サンフランシスコに着いた時に、それこそ、さっきの日の丸演説というのを伊藤博文がやって、明治維新は一滴の血も流さずに行った革命であると。そして、この日の丸は、これから西洋に登って行って、文明の象徴のようになっていくんだって英語で演説をしたんですよ。32〜3歳じゃないですか。そういう意味じゃあ、ロンドンへ行って良かったのかなあと思うんですけど（笑）」

一同「（笑）」

富岡「これは新聞にもヨーロッパまで届く、物凄く評判になる訳ですよ」

水島「ライジングサン号で演説したんですよ」

富岡「そうですね。だから、これを読んでいると、確かに大久保とか彼らが帰って来て、やはり急速に西洋化しなきゃいかんと。これはやらなきゃいかんと。大体、差は30年、ないし40年だから、絶対に埋められるはずだということで、西郷との間に段々距離が出て来るんですけど、彼らも、やっぱり西洋にもいいところもあるし、我々は産業革命以降のイギリスなんかを見ていて、これは絶対に取り入れて行かなきゃいけないけど、かなり、こいつらヤバイ部分があるんだということを、彼らは、ちゃんと見ているところがあったと思いますね」

水島「うん」

富岡「だから、そういう意味ではね、物凄く苦労しながら、どうやって、我々は、この明治国家を創っていくのかというね、何て言うかな、プロセスは非常によく解るし、この中で私が天皇の問題と絡むことを言えば、ニューヨークに行った時、バイブル会社に寄るんですよ。その時に彼らが当然、禁教でしたから、でも実際に彼らは知識としてはキリスト教なり聖書を知っていたと思うんですが、バイブル会社に寄った時の記述でね、色々説明されると、こんなことを言っています。

原文の方を読みますね。『西洋の人民、各文明を持って相争う、しかし、その尊重するところの新・旧約聖書なるもの、吾輩にて、これを検見すれば一部、皇統の段あるのみ。天より声を発し、死衆、（死んだ者ですね）また幾、（復活ですね）以って、瘋癲（ふうてん）の戯言となすも、かなり、かの異端を唱えて磔刑にかかれし者をもって天帝の（これは未だGODの訳が神じゃなくて天帝だったんですね）天帝の真摯、誠の事無し、慟哭して拝跪す（拝むと）我、その涙の何によって生ずるかを怪しむ』という感じで聖書を読んでね、その『瘋癲の戯言なり』と」

水島「うん」

富岡「まあ、最近の学生は瘋癲という言葉を知らないので、まあ、『フーテンの寅さん』を知っているかって言うんだけど（失笑）、瘋癲、要するに全くの…」

水島「根の無い、根無し」

富岡「ただ、そのあとに久米はね、でも、これは、みんなが読んでいるんだと」

水島「うん」

富岡「向こうのホテルには置いてあるし、貧しい人も読んでいるし、偉い人も読んでいると。じゃあ、日本でこれに替わるべき精神的バックボーンをどうするかっていうと、これは宗教議論ですよ」

水島「うん」

富岡「そこで、やっぱり天皇だろうと。天皇をどうもって来ると。丸山眞男が、精神的代用、神、GODの代用としての天皇ということをしていましたけども、だから、こういう状況の中で、つまり、じゃあ、儒教か仏教か神道か、どうするかと。どうも伊藤が、この際、耶蘇教（やそきょう）にしたらと言って、みんなに袋叩きになったという一節もあるんですけども（笑）」

水島「う～ん」

富岡「これ、ちょっと、はっきり判らないんですけど」

水島「うん」

富岡「ただ、そういう中で、やはり新しい天皇、近代国家の中の天皇というのをつくっていかなきゃいけなかった。ここに明治維新の近代グローバリズムで得たものと失くしたもののという、非常に大きな問題があったと思うんですね」

水島「ただ、その問題で言うとね」

富岡「うん」

水島「今、丁度、丸山眞男と言ってくれたけど、代用品って考えるというのは正に代用品で、代用品になると思っている、あの男の唯物論」

富岡「うん」

水島「そういう感じがするんですね」

富岡「まあ、言葉はね。言葉は悪いんですけど」

水島「だから、この時代に合った天皇の在り方というのには、本来、天皇っていうのは、どういう存在なのかっていうのが無いとね、時代に合わせて、みんなが求める、こんな風

にピースマークやってくれる天皇陛下の方がいいとかになっちゃう訳ですよ」

富岡「なっちゃう」

水島「今、一番危険なのは、そこじゃないかなと。皇室の危機というのは…」

富岡「だから『夜明け前』の島崎藤村のお父さんは、平田篤胤の没後の門人ですから、王政復古でね」

水島「そっちの方ですね（笑）」

富岡「これは本当の天皇に戻るんだと。最も古いものに戻るっていうね。それがもっとも新しい革命だという思い。でも実際に蓋を開けたら、明治政府は非常に西洋的な、そういうことであって、失望して明治天皇のお馬車に扇を投げつけて、結局、牢死していくという歴史。だから、藤村のお父さんが考えていたのは、天皇は西洋的なGODではないけれども、天皇という本当に古代的な神性と正に民がね、完全に一致していく」

水島「うん」

富岡「ですから藤村のお父さんは、廃仏毀釈を賛成するんですよ。もっと廃仏毀釈をやらなきゃいけなかったと」

水島「いや、そうですよ」

富岡「うん。本当はやらなきゃいけない。そうなれば、日本は政教一致国家になる。で、恐らく、藤村のお父さんがあの時に目指した、徹底した政教一致国家。君子になったら多分、イラン革命的な1979年の宗教一致国家になった。だけど、明治政府の政治家達は、やっぱり、そこまではいけないから議会政治にもっていった」

水島「いや、だから、さっきね、稲垣さんが言ってくれたけど、『道』の思想っていうのは時間ですよ」

富岡「うん」

水島「ずうっと継続しているじゃないですか」

富岡「うん」

水島「それとね、今、言った様に時代に対応して変化していかなくちゃいけないっていうね、これは勿論、さっきソニー・タンの話をしたけど、西欧はどんどん発明していく」

富岡「うん」

水島「色んなことをやって文明をつくっていくっていうね。所謂、発展、ハッキリ言うと唯物史観ですよ。こういう問題と、やはり我々がぶつかっていたのは、それだけじゃないだろうというところがあるんじゃないかと（苦笑）。だから、皇室の祭祀だけでも色んな儒教や仏教や神道もね、流れ、これは総合宗教じゃないけど、物凄いじゃないですか。哲学的にも、こんなに纏まった幅広く懐の深いものは無かった。だから、そういう風に考えれば、段々と廃仏毀釈までやってしまう。これは日本人の本来の姿じゃないんじゃないの？」

富岡「うん。それは廃仏毀釈を、それに対して、どう考えるかで大きく分かれたと思いますね」

水島「そうですね。だから、私はどっちかと言うと、ここまで言う、極端で、また怒られるかも知れないけど、連中が軍国主義だ何だって言うのは、例えば、考えの違う奴は今、イスラエルでやっていますけど、考えの違う、宗教の違う奴は抹殺して宜しいと。生存に危なければと。パレスチナ人を今、やっているようにという、或いは、旧約に異教徒はと、ありますけどね。

それと、もう一つ言うと、スターリンとか共産主義者達は、反革命分子を粛清して宜しいっていうのと共通項があると、私は思っているんですよ。ところが日本の場合は、国譲りっていう話をしましたけど、そういう習慣は基本的に古代から無いんですよ。

だから、そのこのところの違いがね、明治維新の中に、ちょっと危険なものがあると感じるのは、そういった廃仏毀釈とか、いいものとかいうのも全部、捨てて一本化して、これは守る為に仕方が無いっていう言い方があるかも知かんないけど、近代化の為に大事なものというか、日本人が持っていた懐の深さや優しさ、そういう一番大事なものの全部を捨てたんじゃないかっていう気がしているところもあるんですよ」

富岡「う～ん…」

水島「だから江戸の良さっていうのは無くなってしまっているっていうのがあるんですけど、皆さんにも聞いてみたいと思います」

富岡「うん」

水島「茂木さん、今、ああだこうだと出ていますけど、どうですか」

茂木「教育勅語から『天』という概念が消えたというのは、僕は今日、初めて気が付いて、ああ、なるほどと思って、つまり生身の天皇そのものが超越化されたっていうことですね」

富岡「そうです」

茂木「これって、大場先生、中国の思想からは出て来ますか、この思想というのは」

大場「いや、基本的には『天』と一体となっているから権威があるという言い方はしますが、それでも、それも結局『天』というものを判断するのは、士大夫と呼ばれる儒教的教養のあるエリート層に委ねられていますから、当然、それを媒介にして牽制されますので、徹底した絶対権力者ということは、まず無いですね」

茂木「ですよねぇ。だから元田さんが、この考えを何処から引っ張り出して来たのか、僕、凄く知りたいんですけど」

大場「う～ん、どうなんですかねぇ（苦笑）、う～ん…」

茂木「ヨーロッパの王権神授とも違いますよね」

大場「うんうん、うんうん」

富岡「違うんですよね」

水島「それはね、非常に（苦笑）」

富岡「だから、そこなんです」

水島「だから、それね、大事な話ですよ」

宇山「あ、私も発言して宜しいですか。実は、私も茂木先生と同じように、その話を非常に興味深く聞いたんですよ。儒教的な考え方の中で、天皇が『天』と結びついていた存在であると。そして、その天意を汲み取って、その天皇とか、中国の皇帝というものが存在しているというような儒教的世界観があった訳ですね。それが、明治維新以降、明治憲法が出来ていって『天』というものの概念が外れていって、天皇の神格化ということに繋がったという富岡先生のご指摘だったと思うんです」

富岡「皇室そのものが」

宇山「皇室そのものがね。ただね、私は、こう思うんですよ。実は、この維新の元勳達というのは、やはり天皇をそこまで現人神の様に、超越的な存在として本当に扱っていたのかと問われれば、私は、そうでない部分も結構、あると思うんですよ。特に伊藤博文なんかは井上毅と違って、やはり天皇というものを西洋の王と同じぐらいのものとして捉えていたと思います。井上毅はね、そこは大分、違っていたと思うんですが」

富岡「シラスですから」

宇山「そうですねえ。ええ。ですから、やっぱり明治の中に於ける天皇の存在というのは、制度的なものに過ぎなかった。それが現人神という超越的なその神格化、神性というものを帯びていくというのは、昭和の時代ぐらいになって軍国主義の台頭ということの中

から、そういったものが帯びて来るのであって、明治の初期、中期ぐらいの頃には、そういう意識というのは基本的に無かったと思います。

それと、この天皇論で、もう一つ是非、言わせて戴きたいのは、王政復古というものの考え方というのは、決して明治になって急に生まれたものではないと、私は思っている訳ですよ。やはり、これは江戸時代の中から水戸学として、尊王の思想というものが、ずうっと一貫してあり、それが明治時代になって、わあっと花開いて、大楠公のような尊王精神というものをよしとするという発想というのが、明治時代の中で制度化されていくという点では、やっぱり天皇の存在というのは江戸時代から明治時代に、ずうっと継続性があって繋がっていて、そこに、ここから明治時代だから断絶して王政復古で江戸時代とは違う非近現代と、そして現代、近代だというような、そういう時代の断絶というものは、思想的には無かったという風には捉えますね」

富岡「ちょっと大場先生、伺いたいんですが…」

大場「はい」

富岡「例えば浅見綱斎（あさみけいさい）の『靖献遺言』とかありますよね」

大場「はい」

富岡「それが山本七平なんかは、その辺りから現人神信仰の入り口っていうか、だから、そういう意味では、宇山さんがおっしゃるように繋がっているんですよ。ただ、それがあがる形をとって出て来たのが、やっぱり明治維新だったって。そういう理解でも宜しいですか」

大場「あの山本七平の例のやつは、僕からすると、かなり不満でして（微笑）」

富岡「ああ、そうなんですか（笑）」

大場「そもそも浅見綱斎の『靖献遺言』の議論は、忠誠を臣下の側がどう尽くすかという話であって、その時に主君の責任を云々している様では、忠誠にはならないから、こちらの生き方として、どうかという話ですよ。そのあとに、山本七平は水戸学の方に三宅観瀾や栗山潜鋒が山崎闇斎（あんさい）の門下で入って行って、そこで、また水戸学が先鋭化したと言うんですけど、栗山潜鋒、三宅観瀾の著作を見ると、もう後醍醐天皇から後鳥羽上皇から歴代天皇をめちゃくちゃんに批判されていて、こんな暗君が続いているから朝廷は権力を失ったんだということで、めちゃくちゃんなんですよ。その時に提示されているのは、やっぱり徳であるとか義という考え方です」

富岡「はいはい」

大場「それは、先程の話にもなりますけど『天』というものや『天照大神』があり、その意志を受けているかどうか問題にされるのだという議論で通じている訳です。だから日本は天皇によってもっていて、天皇が、いざとなったら、みんなが集まれば何とかなるとい、かなり単純化されたような思想っていうのは、やっぱり幕末維新时期になって来て藤田東湖が、ある種、アジテーターの役割を果たしましたから、かなり歪曲して尊王論を流布したと」

水島「うん」

富岡「はい、はい。なるほど」

大場「だから会沢正志斎という水戸学者と断絶しちゃう訳ですけども、その政治的な流れによって生まれたものであって、江戸の伝統思想かと言われると、実は違うのではないかということですね。はい」

水島「だから、そこですよ」

富岡「はい。そういうことですね」

水島「例えば、西郷南洲の遺訓とかに、よく『天』というのが出て来る訳ですよ。『敬天愛

人』もそうですけどね、明治の中心人物の一人だから、これが『敬天愛人』という言葉で色んな解釈をするんだけど、実際、あと西郷がよく使うのは『道』ですよ」

富岡「うん」

水島「だから『天』というのを、さっき言った様に、所謂、仏教で言うと、例えば兜率天とか帝釈天が居るような、ああいう『天』なのか、或いは、さっき、おっしゃった中国の皇帝を選ぶような『天』なのか。じゃあ、西郷南洲の『天』。この『天』っていうのは何だろうと言った時、私は宇宙とか全体のことで、そして、上から下に天孫降臨っていうのも勿論あったけども、だけど南洲が言っている『天』というのは、上にあって何か特別なものじゃなくて、宇宙全体だから自分達も含まれている。国民もという、そういう『天』という感覚が、西洋的な自分があって他者があるみたいなね…」

富岡「そこなんですよ」

水島「或いは、世界があるみたいな感覚じゃないんじゃないかというような視点が…」

富岡「ただ陽明学ですよ。西郷は陽明学」

水島「陽明学ですよ」

富岡「陽明学だと宇宙と自分の一体化と言うよりは、やはり、そこで『天』の概念と自分を分けませんか」

水島「陽明学っていうのは、そういう解釈をしていないんでね」

富岡「はあはあ」

水島「イデオロギーで動くんじゃなくて『天』で動くから、行動と知行合一というのがあると思っているんだけどね。だから、知と行動が別々で何とか一致させる訳じゃなくて、つまり一致してないじゃ、そういう行動をしちゃいけないみたいなね」

富岡「うん」

水島「そういうことなので、これは東洋的な禅の世界に近いけども、今、言った様に自分と他者が分かれているっていう発想、さっき言った丸山眞男が完全にそうで、私は、いつも読む度に不愉快になるんだけどね」

一同「(苦笑)」

水島「あんたは解ったようなことを言っているけれども、全く唯物論でしょっていうね。みんな、これとこれがあったらこうなると解釈するけども、そういうところがあるってね、まあ、ちょっと聞いてみましょうか。稲垣さん」

稲垣「はい」

富岡「うん、さあ、聞こう」

水島「南洲翁の『天』というのが、よく使われるでしょう」

稲垣「ああ、はい」

水島「『敬天愛人』も」

稲垣「はい」

水島「あと『道』というのも使う」

稲垣「(頷く)」

水島「さっき言った継続性とか全体性だと、私は思っているんですけど」

稲垣「はい」

水島「稲垣さん、この南洲の『天』について、どう思いますか」

稲垣「はい。まず、山本七平氏の現人神の創作者については、ちょっと、あの説明としては、あまり上手くいっていないと思います。西郷南洲翁に関しては、まず南洲翁が『敬天愛人』という言葉を使ったのは、自分が作った言葉ではなくて、他人から借りた言葉であるというのが色々な研究で判っていて、先程、その名前も出ていましたけど、中村敬宇

(けいう)、正直(まさなお)ですね。

最初に教育勅語の原文を起草して『敬天愛人』というのを入れたけれども、これがキリスト教とかそういったところに対する配慮から、そういう宗教的な部分が削られたということですけども、でも南洲翁が使ったのは、やはり、自分の思想を表現するのに丁度いいということで『敬天愛人』という言葉借りて来て使ったということになる訳ですけども、じゃあ、『敬天愛人』の思想というのは一体、何かと言うと、これは広く戦国時代から『天道思想』という言葉が、民間に広く伝わるようになった。伝わるというか生まれて来た訳ですね。

これは先程来、話されている日本的な神道と儒教、そして仏教、一部、道教とかも、ひっくるめた大きな意味で思想があるんですけども、その軸になっているというか柱になっているのが支那の古代、周王朝の『天命思想』な訳です。『天命思想』というのは一体、何かと言うと、先程のお話にもありましたように『天』との調和ですね。

万物の主催者である『天』と調和しながら政治を行えば自然も循環するし、そして、全てが上手く行くと。そういう考え方が軸になっていて、この考え方は聖徳太子の十七条憲法にも出てきますし、南洲翁も、特に『論語と孟子』というところから『天命思想』を受け入れています。これは一体、どういうことかと言うと『天の意志』というのが、あらゆる事象であるとか民意に現れると。この民意に則った徳に基づく政治を行えば全てが上手く行き、その人は王として、天使として支配することが出来るんだという考え方が軸になっています。

これが『易姓革命』の思想にも繋がって来る訳ですけども、我が皇室は『易姓革命』の思想による挑戦を何回か受けているんですけども、奇跡的に撥ね退けて現在まで皇統が維持されている。しかも易姓と言うけど、皇室には姓が無い。でも武家・政治家達は、この『易姓革命』の思想を、武家の攻防の中で援用してきたと。

例えば北条泰時も、これによって承久の変(乱)を起こしていますし、そういった形で、ずっと『天命思想』が軸を為して、そういう政治も行われて来たり、神道、儒教、仏教という、所謂、『天道思想』の中で大きく日本の歴史を動かして来て、一つの大きな成果として明治維新、そして最後は南洲翁という大きな存在が生まれたということが、大きな流れで言うと、そういうことだと思います」

水島「うん。今言った様に高天原の問題とかどうなるかですけど、色々具体的に詰める面白と思います。吉野さんは、この話を聞いてどうですか」

吉野「今日のテーマの『近代グローバリズムで日本が得たもの、失くしたもの』という考えで、天皇というものがどういう解釈になって、どう失われたかっていうのを考えていたんですね」

水島「うん」

吉野「元々アメノミナカヌシから始まって、タカミスヒ、カミスヒ、ウヒヂニ神とスヒチニ神とか、ずうっと行く時、この前も言いましたけど名前ですよ」

水島「うん」

吉野「これは何故、なっているのかって言ったら日本語は一音一義ですから、全て意味がある訳ですね。アマノミナカヌシだったら『ア』は始まるという意味がある訳ですけども、そこで出て来るカミというのは、我々が神、GODを神と訳してしまったから、明治時代から問題になっているのであって、元々『カ』は火でエネルギーという意味です。

『ミ』は中味」

水島「うん」

吉野「だから元々エネルギーの状態という意味ですよ。ですからアメノミナカヌシって

というのは、まあ、時間が無いので端折って言いますけど、宇宙が始まったビッグバンだったということです」

水島「これは量子力学だ」

吉野「それからタカミムスヒ、カミムスヒっていうのもプラスの電化の素粒子とマイナスの電化の素粒子が出来て、アシカジノヒコジノカミというのは、それが元素になったと。それでアマノトコタチで宇宙が出来て、クニノトコタチで地球が出来たと。そのカミです、全部ね」

水島「うん」

吉野「つまり量子力学的なエネルギーから始まり、それが物理的なエネルギーになって、それが普通の山の力とか海の力とかっていうエネルギーになっているものですから、八百万の神というのはエネルギーの状態があるっていう意味で、それに対して日本人は大いなるものであると敬意を出して来たというのが神ですから、こんなことを言うとキリスト教徒の人、ユダヤ教の人に申し訳ないけど、そういうのとは全然、違って宇宙の成り立ちから今日に至るまでの状態のことは全て敬意を持つものだと思っている訳ですよ。

『レイ』というのもそうですね。『レ』というのは美しい。『イ』というのは、うつろうということですから。変化していること自体、素晴らしいのが『レイ』なので『レイ』と言うと、靈魂とかお化けみたいなね、背後靈とか使いますけど本当はそうじゃない。そういう言葉がずうっとある中で、神の状態というのをずっと伝えていたのが、天照大御神から始まって今上陛下ということになって、何とか上手い事、ヨーロッパと同じような政治制度にしないと、右大臣とか左大臣とか言っていては駄目で、やはり外務大臣とか経産大臣とかしなきゃいけないのを、明治の人達は多分、物凄く悩んだと思うんですよ」

水島「うん」

吉野「それで学者達が集まって、どうやったら辻褄が合うのかということで、謂わば創作したのが、天皇に統帥権があるという形にせざるを得なかったと、僕は思うんですよ」

水島「うん、うんうん」

吉野「そこにちゃんとブレーキがあったと思います。うん。先程、富岡先生がおっしゃったように、大日本帝国憲法というのは芸術作品のようなもので、しかも初めて創った西洋式の憲法じゃないですか。だから色々欠点もあったんですけども、その欠点を上手く車のハンドルの遊びにしたのが元老院だったと思うんですよ」

水島「うん」

吉野「この元老院というシステムは、大日本帝国憲法にも書いてないし、皇室典範にも書いていないのに、でも存在していて」

水島「うん」

吉野「彼らが天皇陛下にこうだと思いますけども、どうですか。次の総理大臣は誰ですかと言った時、うん、っていうことによって天皇に全責任が行かないようにしていて、実際は統帥権もあったし、元首でもあったかもしれませんが、それを守る仕組みがあった訳ですよ。これが西園寺公望を最後にして、言うことが出来る人が居なくなったもので、軍部が使ったから、それで後に、この制度は軍国主義だっていう風に言われる訳ですけども、その元老院のシステムが物凄く上手く機能している時は、あの憲法が物凄くいいものだったと思うし、それから西洋式の他の国の憲法と似たような形にして、あたかも、キリストという、まあ、GODですよ。キリスト教の神が居るヨーロッパは、みんな、キリスト教ですから、それに相当する様に、まあ、ハッキリ言いますけど白人連中もごまかせるし、日本国内的に言ったら神なんだと」

水島「うん」

吉野「神というエネルギーの状態だけれども、彼らが勝手にG O Dと勘違いしてくれたと（笑）、それでシステムを上手く整えるようにするっていうのに、僕は物凄く当時の人達の御苦労があったと思うんですね」

水島「うん」

吉野「ですから、その思想として正しいか正しくないかというのは勿論、議論すべきところがあると思うんですけど、じゃあ、そうしなかったら、どうなっていたんだって言ったら、やっぱり無理ですよ。だから、冒頭で申し上げましたけども、もしも幕府軍が勝っていると、アメリカと言うか、フランス、ロスチャイルド側の方が資金源だって言ったら、幕府の姿はどういう風になっていたのかっていうことを考えると、結局は、こういう風にせざるを得なかったと思うんですよ。それは戦後も同じだと思いますね。当時は、そうせざるを得なかったと。

ですから、恐らく日本国憲法も当然、色んな不備があったけど創らざるを得なかったの、後の時代の子孫達に解決して貰いたいという思いがあったと思うんですよ。だから、明治維新も同じだと思うんですよ」

水島「うん」

吉野「僕は、昭和・平成の時代になって、橋本龍太郎から始まって小泉純一郎ぐらいの時に、日本というものが未だ残っていたのに、これがお金だとか市場だとか、それから、市場によって作られる信用自体が信頼すべきものだということで、ぶっ壊されてしまって、最後、けちゃんけちゃんに今、なっている訳ですけども、同じことが起こったのが、多分、17世紀ぐらいのヨーロッパだと思うんですよ。それが、先程言ったヨーロッパでも、ちゃんと保守思想というのがあった訳ですけども、やはりロスチャイルドが出て来ることによって、政治や思想は表向き、存在していたんですけども結局、バックに操られていて、その演じている人達も騙されている事も知らないし、操られていることも知らないのにやっていたと」

水島「うん」

吉野「そして学問として、或いは、思想として、政治が行われたり革命が行われたりしていたと思うんですよ。でも、結局、今のヨーロッパって何だと言ったら、もう、信仰心すら無くなってしまって、特に、パリ・オリンピックの時は酷かったですよねえ（失笑）、これがフランスかというような状況になっていると（苦笑）、つまり200年ぐらい前のヨーロッパが丁度、竹中平蔵だとか小泉純一郎とかが居た時のヨーロッパで、それで、その勢いで今度は日本を刈りに来たっていうのが明治維新じゃないかという風に思っているんですね。

ですから、彼らは私達よりも200年以上、早くやられているので途中で気が付いたのは多分、信用というものが古典的な親子だとか信仰心だとか、まあ、日本で言ったら祭祀だとかっていうことじゃなくて、金だと。金が共通して使えているということが、信用できることですよ。ヨーロッパも、そういうことに毒されていた頃で、その連中の力で明治維新に来た時、日本人達がどう抗ったというか、抵抗したかっていう姿がああだったと」

水島「うん」

吉野「ですから僕も別に長州とか薩摩だとかがいいとか悪いとか、福島県の人達が可哀想だとか、そういうことじゃなくて（笑）、みんなが戦ったと思うんですよ」

水島「うん」

吉野「多分、その時は、そんなに悪い奴らは居なかったんじゃないかと思うんですよ。だけど、もうちょっと、こうしたらいいでしょっていうことが、あとの時代では勿論、言える訳ですよ。戦後もそうですよね。戦後も出来たと思いますよ」

富岡「だから今、おっしゃった大日本帝国憲法を運営していく元老院というか、運営していく人達のハンドルミスというのが（苦笑）」

吉野「そうだと思います。だから今で言ったら専門者会議とか有識者会議ですよ」

富岡「うん」

吉野「それって全然、今の…」

富岡「さっき、宇山さんがおっしゃった伊藤博文の一説によると、もうちょっと西洋型の議会的なものにしたいと。出来れば帝国憲法改正を考えていたって言っていますよね。だから、もうちょっと、だから統帥権とか、そっちの現人神に行かないようにしておこうという…」

吉野「そうです。だから、そうしなかったから結局、最後は、それこそ本当に軍国主義になってしまった訳です。陸軍省と海軍省が仕切ってしまった訳だから」

水島「統帥権がね」

吉野「だから彼らが元老院を仕切ってしまった訳ですよ」

茂木「さっき、宇山さんがおっしゃった維新の元勳達の多くは別に、それほど尊王でもなかったし」

宇山「うん」

茂木「天皇のご存在を上手く利用して国家管理をしようと思っただけで、その為に置いたのが正に元老ですよ。だから元老がちゃんと法的に定義されていないから、彼らが死んでしまったら、そのあとに何も無いってことです」

吉野「全くそうですね」

茂木「うん」

吉野「だから本来であれば、大日本帝国憲法の時に憲法改正をすべきだった」

茂木「そうそう　そうそう。そう」

富岡「改正したかった」

吉野「うん。それが出来ていなかったから結局、今日に至ってしまっているということだと思うんですよ」

富岡「日本憲法もそうですね（笑）」

吉野「いやいや、だから元老院というものが当初、明治元年から暫く大正に至るぐらい迄は非常に上手く機能していたのを、やっぱり、そこも日本国憲法も本当はサンフランシスコ講和条約に調印した時、本当は新しく作らなきゃいけなかったのと同じで、同じことを二度ミスっているんだと思います」

富岡「ミスっているんですね」

吉野「うん。だから、そこで失ったものというのは、知らない人達が軍国主義だ、軍国主義だって、よく言っていますけど、全然、軍国主義なんかじゃなかった訳ですよ。むしろ、その逆で、神という存在が居て、ちゃんと祭祀の道があって、未だ当時の日本人達は、普通の一般の庶民達は本当に信仰心が高かったはずですよ。ですが、それが完全に壊されたのは、勿論、GHQによって日本国憲法を作られちゃったからだとは思いますが、でも、ですからあそこで何を失ったのかと言ったら、ある程度、天皇の存在を『神』という言葉で上手いこと訳した訳ですね。GOD＝神ということにして、みんなに勘違いをさせて、庶民は解らないから、ああ、神なのかなって」

富岡「(笑)」

吉野「江戸時代迄は多分、神と思っていたと思いますよ」

富岡「うん」

吉野「だから存在していること自体は、ちゃんと解っていたとは思いますが、じゃあ、鎌倉

時代だとか室町時代とかの一般庶民が天皇を中心として、この世の中が回っているなんて思っている訳もないし」

水島「うん」

吉野「その程度の存在でよかったものを神に祀り上げないと、もう、どうしようもなかったということですから、本来であれば何回か戻すチャンスはあったはずですよ。それによって、結局、彼らは思いっきりグローバリストですよ。逆に言えば彼らが天皇を神にしたんだと思いますよ。それで我々は、皇室制度というものを壊すことを始めてしまった」

水島「うん、なるほどね」

吉野「だから、それを肯定している人達が居るじゃないですか」

水島「うん」

吉野「それは、それこそ天皇教になっちゃう訳ですよ。日本は天皇教なんていうのはなくて、みんなが祭祀の道で慈しみ合って愛し合っていた国だったはずなのが今、ここまでグジャグジャに壊れているという（苦笑）、ですから多分、何故、明治維新をやらざるを得なかったのかっていうことを論ずることが、この現在の問題に繋がるんじゃないかっていう風に思っています」

水島「そうですね。今、言った事で言うとね、視聴者から、よく聞かれるのは、天照大神の弟さんが何故、暴れたりするんだと」

吉野「うん」

水島「まあ、人格神的な形でね、暴れたり、泣いたり、喚いたりするんだと」

吉野「うん」

水島「あのスサノオのことですけどね。でも、私は、いつも『天』の問題で言うと、スサノオは世界のことだよと」

吉野「うん」

水島「つまり嵐になってとかね、色んなこともあるだろうと。そういう風に考えればという風にしか説明が出来ないですよ」

吉野「だから、そうなんです。神ってエネルギーの状態だから」

水島「そうなんです」

吉野「だからギリシャ神話みたいにね」

水島「そう」

吉野「だから人間のような、それは、そういう風に物語として伝えなきゃいけないから、そんなのは別にね…」

水島「そう、神話の物語でもねえ」

吉野「仏教でも何でも昔は、みんな、物語にしてとか手紙にするしか方法が無いので」

水島「うん。だから、そうですよ。そういうところがね」

吉野「うん」

水島「今、言った様にやれば、みんなが、すんなり入って来るしね」

吉野「うん」

水島「それから、さっき、チラッと書いていたけど、本当に最新の素粒子物理学とね」

吉野「うん」

水島「それと、もう一つ、敢えて言っておくと、禅の世界と全く矛盾しない世界です。エネルギーの問題っていうのは、あって無い。ゼロの世界。『空』っていうのは、そういうところですから。『空』っていうことがあるということと、吉野さんね、それと、もう一つ、さっき元老院の話をしてくれたけど」

吉野「うん」

水島「これは、どうですか、皆さん、天皇の存在というのは、いつも聞かれると、一番、解り易いのは簡単に言うと、太陽じゃありません、月ですと。人を温めることとかは太陽神。太陽が出来ますけど、でも暗い夜の闇に、何か希望みたいなものを、道を与えてくれるものが、これ、いつも言う例の和泉式部の『暗きより 暗き道にぞ 入りぬべき 遥かに照らせ 山の端の月』というね。

これは仏教の事を言っているんですけど、実際は天皇もある種の媒介としてね、そういった中間の中で良きものの体現を、日本とか世界の良きものの体現を為さっている。こういう形で、でも人に食べさせたり、お金を与えたり基本的には出来ないというね、そういうのが基本だったんじゃないかと。だから明治維新も、ああいう時代で、また後半、皆さんの意見、聞きたいと思うんだけど、無理をしなきゃいけなかったんじゃないか」

吉野「そうだと思います」

水島「さっき言った、その辺のところをやっておかないと、私は現人神論にあまり、あとう、あまりじゃない、反対ですよ」

吉野「うん。だから大日本帝国憲法は『万世一系の天皇が、これを知らず』という書き方をしていますよね。つまり天皇主権じゃなくて国体主権な訳ですよ。それを、みんなが間違えていて、天皇に統帥権は勿論、あって元首なのかもしれないけども今、居る天皇じゃなくて、少なくとも…」

水島「あの時代は百二十何代…」

吉野「そう。そう。そうそう。だから、神日本磐余彦（カムヤマトイワレヒコ）から当時だったら明治天皇までの人達全員の意志であり…」

水島「うん。そう」

吉野「国体だから過去の、それこそエネルギー状態である神もそうですし、民もそうだし、臣もそうだし、みんなが一緒にやっている象徴として、代表者として天皇がやっているんですよと言っているから、もう、その主権というのが『主』は、もう主語の主ですからね」

水島「そうなんです」

吉野「もう、そのことが使わざるを得なかった訳ですよ。神の権利を代行するっていうのが西洋の考え方だから、だから聖書に手を置いて、私は宣誓するって言うでしょ」

水島「あのねえ、日本国憲法に国民主権なんていう、とんでもないことを入れたのはその影響があるんだと思いますよ」

吉野「そうですよ。だから、結局、本当は国体主権だったのに今、生きている人達だけしか主権が無くて、選挙権がある人達だけが…」

水島「だからもう何も無いって言うね」

吉野「だから凄く狭くなっちゃった。だから、もっともっと大きかった」

富岡「国体イコール現陛下になっちゃって」

吉野「そう、そうそう。だから違いますよね」

富岡「うん」

吉野「だから、やっぱり、そこで上手くそうせざるを得なかったところを、色んな風に悪く解釈されてきてしまったこともあるから、だから、その当初の、少なくとも明治元年から暫くの間っていうのは、そんなに変な人達は居なかったんじゃないかと思うんですね」

水島「いやいや（笑）」

吉野「もう一回、元に戻ったら、こんな感じでしか出来ないじゃないですかって」

茂木「30年代の国家主義者の言っている事と、戦後のリベラルが言っている事は同じで

すよ」

水島「ああ、なるほどねえ」

茂木「天皇は主権者であって、だから戦争責任があるんだって、もっていくじゃないですか」

水島「ああ、ああ、そうか」

茂木「うん。本来、主権なんていう考え方は、日本に無いし、イギリスにも無いですよ」

水島「うん、そうだよねえ」

茂木「うん。あれはねえ、やっぱりフランス革命で生まれた考えですからね」

吉野「そうですね。だから憲法だって、日本国憲法の前文なんてフランス革命のことを書いてあるだけじゃないですか、全部（笑）、だから日本の事なんて書いてないですよ」

水島「この話をして戴くのは凄くいいことでね、国民主権っていうのも殆どの人が当たり前みたいな気にいる人が多いんでね」

茂木「そう。だって小学校から教えるから（苦笑）」

水島「そう」

茂木「もう宗教です、これ」

水島「そう」

吉野「（笑）」

富岡「最悪の宗教で（笑）」

水島「これね、こういう言い方をするんですよ。中国人や色んな外国人がガンガン、土地を取得しているじゃないですか。でもね、ここは2000年以上、続いた天皇の国ですから、天皇から所有権という形で預けられているだけだから、簡単に外国人にポイポイ、金を貰って売っちゃいけないよと。天皇様からお預かりしている所有権を持っているだけだから、外国人に売っちゃいけないよって言い方をすると、みんな、意外と納得してくれる。日本国の土地が、永久に自分だけのものだと思っているからね。だから、その時間をちゃんと言っておかなきゃ」

茂木「公地公民にしましょう（笑）」

一同「（笑）」

水島「本当に冗談抜きにねえ」

茂木「うん、そう。一定に班田収授させて」

水島「そうそう、そう。そういう、ある種のねえ、仕組みを持つと、土地の規制にはいいかも分からないという気がするんですけど、後半は、明治維新の問題、それから、今、現代のグローバリズムという問題の中で、我々が、どういう風に生きて行くべきか今、ちらっと公地公民なんていう話も出ましたけども（苦笑）、日本の在り方を考えてみたいと思います。一回、お休みします」

一同「（礼）」

<後半>

水島「後半になりました。後半は、現代の日本、まあ、明治維新の影響、先程、色んな方からお話し戴きましたけども、これから、これをどう活かしていくか、例えば憲法の問題も、まあ、所謂、憲法改正ということでも、人によって非常にバラつきと言うか、考えが異なります。例えば自衛隊明記と緊急事態条項を入れたら、それで憲法改正っていう人も

居れば、とんでもないと、前文や九条二項とか、そういうのも全部、変えなきゃ駄目なんだと、或いは、もっと言えば、明治帝国憲法に戻して、それを改正する形にしたらどうかとか色々な言い方があります。

我々の日本の在り方をどうすべきなのかということの中でも、違いが出て来ると思います。そういう意味で、高市内閣が発足しました。一応、最新のニュースだから言っておきますと、高市さんはゼレンスキーさんと電話会談をしまして、この間、一回、表明したように、私達はウクライナと共にある（失笑）、こういうことでね、ゼレンスキーが大喜びしたそうですね。『高市早苗首相と非常に良い電話会談が出来ました。ウクライナへの支持、そして、ウクライナ国民の勇気への敬意のお言葉に感謝致します。こちらから首相のご就任にお祝いを申し上げます』と。今、言った様に、この史観ですね。

ウクライナの今、こういう状況の中で『首相にはウクライナ訪問をご招待しました』と。既に3兆円以上もプレゼントしていますけども、これからも援助し、且つ又、復興もお手伝いすると。財源がない、財源がないって言うけれども、その金が何処にあるんだっていう気がしますけどねえ」

一同「（苦笑）」

水島「こういうことは全然、問題になっていない。一体、このグローバリズムとは何だろうという気がしますけども（笑）、もっと言えば、アメリカに対しては、80兆円をプレゼントすると。この間、農業問題を議論しましたけれども、農業で専業農家に、大体1千万円の年収を保障する個別補償みたいなことをすると、一体、幾らぐらいかかるのか。

鈴木教授が前は3千500億円と言っていましたけど、今回は色々値上がりしているのので6千億円ぐらいかかるだろうと。6千億円の予算で食糧、米というものが全部、確保できて増産もするということです。我々の国は、5年間で50兆円を防衛費に使う。食糧安保の事を考えれば、安いものじゃないかなという感じがしているんですけども、こういう問題についても、今回の鈴木農水大臣はマーケット、市場によると。需要と供給によって、米を作ったり作らなかったりする。むしろ増産しようって言った石破さんより、もっと後退している。それから農協も今、値段が高くて農民が大変、喜んでいて。だからアメリカやヨーロッパの国がやっている農業、農業補助とか援助みたいな食糧安保の意識は、全く欠けているという事もあります。

それから小泉さんが防衛大臣になりました。だから、これも大盤振る舞いをするだろうと。防衛費が増えるのはいいと言いますけども、大概がアメリカの武器を買う為のもので、そっちの方にもっていくだろうと言われてます。そういう意味では非常に問題だろうと。

あとは財務大臣は、大蔵省出身の方になって、限界を設けないと言っていますけど、どうも見てみると、消費税の問題は、我々が無くせと言っているのも一切、出ない。食料品の消費税も、選挙の時は確かゼロにするとか言っていたと思うんですけども、中々手続きが難しいからとか言い出している。でも増税する時は直ぐにやっちゃっているのにね（笑）。だから、こういうものを見てみると、高市内閣が今、置かれているのが、いや、私は元々サファリパークの猿山のボスになっただけだから、サファリパークの命令には従わなきゃいけないから、そんなに沢山のことは期待出来ないけれども、移民の制限とか、色々やれることもあるかも分からない。

例えば、外国人の土地取得をやめるとか、そういうのは運用だから。だけど、こういったメインのところは、彼女も中々言わないし、やれないじゃないかというようなこともありますね、さっき言った明治維新から始まるって言うか、高市内閣がグローバリズムを変えて、所謂、ナショナリズムの内閣とか色々言われているけども、私の個人的な意見とし

ては自分の番組で言っているんですけど、本質は隠れていたけども、高市さんは、本当に苦しいけれどもしなきゃいけない。そこを、ちゃんと指摘しておかないと、いつの間にか、ずるずるずるっと安倍内閣みたいになっていっちゃう」

富岡「うん」

水島「そういうことを、私は言っているんですけどもね。富岡さん、どうぞ」

富岡「だから、『責任ある積極財政』の責任あるって何なんだというね（失笑）」

水島「そう、そこですよ」

富岡「あれを外さないと良くないねえ（笑）、あれですよねえ」

吉野「積極財政は責任があるんです」

富岡「うん。そうですねえ」

一同「（笑）」

水島「そっちの方がいいんだっていうね。逆だもんね」

富岡「何か変ですよねえ。文法的にもおかしいんじゃないかっていう気がする」

水島「そう。だから積極財政は積極財政」

富岡「そう」

水島「積極財政に責任を持つっていうねえ」

富岡「うん、だから責任あるなんていう枕詞は要らないですよね」

吉野「だから頭痛が痛いみたいな言い方ですよ」

富岡「そう、そうそう」

吉野「だから本当に積極財政に転換しますと」

富岡「しますって言えばいいのにね」

吉野「そう」

水島「それだけ言えばいいんだけどね」

吉野「要は『責任ある』って付けているということは、少し無責任なこともしますよっていうことですよ」

富岡「そういうことです（笑）」

水島「だからねえ、今、中々出来ない、はっきり言ってやらないっていうね。前向きに検討しますっていうのは、やりませんという意味と同じでね」

富岡「だから、さっきの前半の話で言えば、やっぱり明治っていうのは、西洋列強のグローバリズムに対して、日本が我々の民族をどう守り戦うかっていうね」

水島「うん」

富岡「この戦いがね、それは大日本帝国憲法もそうだし、天皇の問題もそうで、戦っていた訳ですよ。それに比べると、今は全然。僕は高市内閣も、やっぱり、それじゃあ、グローバリズムの波に嬉々として飲み込まれようとしている状況じゃないかと思いますね」

水島「うん」

富岡「支持率は高いですけども、非常に危ういところがあるような気はしますね」

水島「うん」

富岡「うん、そういう意味ではね」

茂木「さっき吉野先生がね、ある段階で国境を越えた資本の動きが始まったと。これが、まあ、大体17世紀で、イングランド銀行とか出来る頃ですね。面白いのは、同じ時代で、逆に国境を閉めようという考えも生まれて、これが正に主権国家ですよ。うん。だから、主権国家というのは、要するに国境を、まあ、動物で言ったら細胞膜。細胞膜をきっちりしてウィルスの侵入を止めるっていうのが近代国家なので、ヨーロッパはその時にもう始まっていたのが、逆にヨーロッパとイギリスがもつれちゃって、アジア、アフリカに

出て来る時に、アジア、アフリカでも同じような細胞膜をつくろうっていう運動が起こって来る訳で、その一つの例が明治維新ですけども、失敗した例がいくつかあるんで、ちょっと、ご紹介しますね。

トルコです。トルコは当時、オスマン帝国と言いまして、巨大国家だったんですけども、ここに、やっぱりイギリスさんが入って来ます」

水島「うん」

茂木「それで関税を下げろとか、自由に投資をさせろとか言ってくる。そうすると、当時、スルタンが皇帝だった訳ですけども、この人は外資に買収されている訳ですよ。それで言いなりになっちゃったので、いや、そうじゃなくて、これからトルコ民族の資本を成長させるんだから、国境線をちゃんと閉めろという運動があったんですね。民族資本イコール、スルタン独裁をやめて国民の政治参加を認めろということで、憲法の制定、議会の開設を要求すると。

ミドハトさんという人が、政府側の人ですけども、彼らに同情する訳ですよ。確かに、我々トルコ民族が、これから世界に伸していくには、やはり一旦、これを止めなきゃいけないから、だから、スルタンの独裁を制限しようっていうことで、時の宰相、首相が議会を認めるんですよ」

水島「うん」

茂木「これをミドハト憲法と言います。そうすると、スルタンから見ると都合が悪いので、何が起こったかと言うと、憲法を認めるけれども緊急事態条項を入れると。それで、国家の非常時に当たっては、議会を止めてスルタン独裁にしろと」

一同「うん」

茂木「これだけを認めたら、この憲法は許すと言って、ミドハトさんは、とにかく憲法を作りたかったので解りましたと言って、緊急事態条項付き憲法にしちゃった結果、翌年、ロシアが攻めて来て、緊急事態ってなって」

一同「(苦笑)」

茂木「それで議会在解散されて、しかも、このミドハトさんは反逆罪で処刑されました」

水島「ねえ…」

茂木「あとは、もうズブズブです。国全体が乗っ取られました。これがオスマン帝国ですね」

水島「なるほどねえ」

茂木「それからエジプトです」

水島「うん」

茂木「エジプトは一応、名目的にはオスマン帝国の一部です。実態は独立国家で、だから、タウフィークは王様じゃなくて副王と言います。その下に、ウラービーという軍人さんがいて、やっぱり外資が政府になっているんですよ。特にエジプトはスエズ運河を造るのにフランス資本が入って、途中からイギリス支援が入って、完全に乗っ取られちゃった訳です。

そのあと何が起こったかと言うと、正にロスチャイルドですよ、英仏の巨大銀行がエジプト政府に金を貸しまくって、それで返せないとどうなるかって言うと、担保として徴税権を握った」

水島「うん」

茂木「何とイギリス、フランスの銀行家がエジプトの財務官僚を務める訳ですよ、乗り込んで来てね」

水島「う～ん」

茂木「歳入をイギリス、歳出をフランスが担当して、エジプト人から取った税金をパリ・ロンドンに送っているんです」

水島「う～ん、ああ～…」

茂木「そうすると、もう国内は荒れ放題で、ナイル川が氾濫しても誰も応急処置しないので、アフマド・ウラービー（Ahmed Urabi）＜別称オラービー・パシャ（Orabi Pasha）＞が立ち上がってクーデターを起こします。それで王宮を囲って、国民の声を聞けと言った。これをウラービー革命と言います。一旦、成功する訳ですよ。

ウラービーが陸軍大臣になる訳ですけれども、何が起こったかと言うと、王様がエジプトに出兵を求めたんです。エジプトの当時のグラッドストーン内閣（Gladstone ministry）が出兵しまして、エジプトを占領し、ウラービーを反逆罪で逮捕し、この人は当時、イギリス領のセイロンに島流しになりました。これについては日本人が記録しています」

水島「うん」

茂木「この事件、ウラービー革命について、記録は文語体なので口語訳にしますが、『数千の将兵が王宮を囲み、ウラービー・パシャを指定王に要求して曰く、第一に国を売る内閣を解散すべし、第二、国会を設立し、万機、抗議に決すべき、三、平静を厳かにして、危急に備えよ。つまり軍備を増強しろと。これを聞いたイギリス人が、直ぐ本国に打電して出兵を求めるといことで、ウラービーは捕まりましたと。こういう話です」

水島「なるほどね」

茂木「この今の文章は、東海散士（柴四朗）という人の書いた『佳人之奇遇（かじんのきぐう）』という本です」

水島「うん」

茂木「はい。東海散士は誰ですかということですが、この方は会津藩士です」

水島「ああ」

茂木「白虎隊員でした」

水島「ほお」

茂木「もう、お婆ちゃん、お母さん、お姉さん、みんな、自害したんですが、彼は病弱だったので、逆に助かった、立て籠もらなくて済んだ。その後、明治になってから、あちこちと転々としまして、西南戦争に従軍するんですね。つまり西郷を敵だと（笑）、西郷を討つぞと言って、従軍して活躍した結果、薩摩藩士の谷干城（たに たてき）という人の知遇を得て、中々優秀だったことで谷干城の秘書官になるんですよ。

それで谷干城が農商大臣になった時に、世界を外遊した訳ですが、彼が同行して、たまたまセイロン島で会ったのがウラービーだった」

水島「ああ～」

茂木「直接、話を聞いて、これは酷いということで、日本人に知らせようということで書いたのが、この『佳人之奇遇』という本で、あとは、『エジプト近世史』という本を書いて、だから、先程、遣欧使節団のお話が出ましたが、明治の指導者は、こうやって当時のアジアの国々がどんな目に遭っているかということを見ているんです。だから、ああなっちゃいけないから、とにかく国境線を固めろと」

水島「うん、うん」

茂木「関税をかけろと。保護貿易にしろと。イコール幕末に結んだ不平等条約の改正があるじゃないですか、日本の政府は、これを一生懸命やりました。例え幕府が勝っていたとしても、同じことをやったと思います。うん。だからねえ、アジア・アフリカの国々の中で、これをちゃんと出来たのは日本だけですよ。その意味で、僕は明治維新というのは本当に偉業だったと思います」

水島「そうですね」

茂木「はい」

富岡「ちゃんと関税をかけるっていうのが大事で」

茂木「そう。そう」

富岡「だから学生にね、グローバリズムっていうのはおかしいんだと。関税が無いなんていうのは異常だって言うんだけど、何故か、え〜っ！という感じですよ」

茂木「うん、うん」

富岡「何かグローバリズムに慣れ過ぎちゃって…」

水島「ね、自分で主権を取り戻すのが、ずうっと明治維新の政府の方針でしたからね」

富岡「そう」

茂木「そうです」

富岡「そうですよ」

茂木「それがね、今、TPPだなんだって、またゼロにしようって話で、何をやっているんだと。それから、これが弟さんです。お兄さんが四男で、本名は柴四郎って言います。ペンネームが東海散士。弟さんが柴五郎と言って、この人は陸軍に入りました。で、清国に派遣されて駐在武官となって北京に行った時に、あの義和団が起こったんです」

水島「うん」

茂木「うん。それで外国人が、どんどん殺された時に、彼が北京駐在の外国人を指揮して60日間、公使館を守ったことで有名になった。イギリスからも褒められて、ビクトリア女王から表彰されて、このことが日英同盟の一個の原因になったということですね」

水島「う〜ん」

茂木「はい、以上です」

水島「本当にねえ、そういう人達が居るんだなあ」

富岡「明治は、そういう人士が居たんですよ」

水島「やっぱりトータルでヨーロッパの動き、ヨーロッパ中心の歴史っていうか、世界っていうのは、それしか見ていなかったから、今の話を聞くと、全然、違う視点でね、アジアから、ちゃんとやっていた人達が居るっていうことだよ」

茂木「僕は凄く感ずるところがあるのは、この彼らが会津藩士なんですよ。つまり祖父母が会津を滅ぼされた。だけれども気持ちを入れ替えて、これからは祖国、日本だっていうことです」

宇山「うん、そうですね」

茂木「うん。この人達は本当に頑張ったと思う。うん。これねえ、教科書に載せるべきですよ」

水島「そう。ならぬものはならぬっていうね」

茂木「そう」

富岡「会津藩は、大日本帝国が負けた時に万歳したっていうのは嘘ですね（笑）」

吉野「嘘でしょ」

富岡「ね。嘘ですよ（笑）」

大場「だって柴五郎大將が最後に、皇居前で腹切ったのが昭和20年8月15日ですからね」

一同「ああ〜、そうですね。そうですね」

大場「うん、うんうん」

水島「だから、それだけね、本当に昔の人は偉かったという感じがね（笑）」

一同「（笑）」

水島「素朴に思うけども、今のことがあったので、またソニー・タンですけどね、これは今のヨーロッパ的な見方で質問する男が居て『ゼロを最初に発見したのはエジプト人だ。ドイツ人が磁器を』これはマイセンですけど『これを「再発見」したのは君達（東洋人）がその製法を共有しなかったからだ。蒸気機関から電気、そして原子の分裂に至るまで、それらは全てヨーロッパの発明だ』と。『貴方が今、着ている服も西洋のものだ』という質問をソニー・タンに言ったら『君の違いと私の違いは単純だ』と。

『君は文明を「発明」だと思っている。私は、それを「連続性」だと知っている』と。『君は磁器や電気、原子を列挙し、まるで歴史がロンドンの工房で始まったかのように語る。だが、君はその道を築いた者達を忘れている』が、実際には『マイセンが「再発見」する千年前に中国に存在していた。印刷術はグーテンベルグが活字を掘る前に、アジアで生まれていた。火薬、紙、羅針盤、時計、これらはヨーロッパが自らの恐怖を超えて航海できるようになるずっと前に』これは皮肉で言っているんですけど。『既に世界を巡っていた。そして君が「ゼロ」に触れたが、それはエジプトではなくインドの発明だ』と。『ゼロが無ければ微分積分も物理学も君が誇るコンピュータも存在していないはずですよ』と。それで、ここからが大事になりますけど『ルネッサンスはアラブの学者達が翻訳した写本の上に繁栄した。啓蒙思想はアメリカ大陸で奴隷の手によって掘り出された銀の上に走った。産業革命のイギリスはアフリカ人の摘んだ綿花とアジアで取引されたアヘンによって動かされていた。ヨーロッパが創造したのは「近代世界」ではない。盗みを世界化し、それを「発見」と呼んだのだ』って、まあね（笑）。

『君は服を文明の証のように語るが布に国旗は無い。綿はインドから絹は中国から。貴族の衣を染めた色素は、君達が支配した植民地から搾り取られた。そして、今、君が誇る「現代ファッション」は君が嘲笑うグローバル・サウスの人々の手によって縫われている。

君は、文明を「発見の数」で測る。我々は、それを「何が生き残ったか」で測る。我々の文明は疫病も戦争も侵略も――君達の侵略さえも――乗り越えて生き残った』と、これはベトナムの戦争のことですね。『蒸気機関は錆びつき、原子爆弾は地球を汚染した』ここは大事なので色を変えたんですけど。『だが稲は今も育ち、言葉は今も流れている』

一同「うん」

水島「『稲は今も育ち、言葉は今も流れている。君達が埋めた文明は再び目を覚ましている。君達は世界を文明化したのではない。世界の記憶を産業化したのだ』それだけだと。こういうような…」

富岡「いいですねえ」

水島「中々いいことを言っているっていうかね、あの質問者のトムさん…」

富岡「ベトナムの岡倉天心みたい」

水島「そういう感じですね。今、言った様に我々の国も、さっきのこういう人が居たんだということですけど、さあ、それでは皆さんに意見を聞いてみたいと思いますけど、宇山さんは、どうですか」

宇山「はい。今のお話ですけどもね、実は、そもそも中国人が羅針盤とか火薬というものを発明しているにも拘わらず、これは西洋じゃありません。しかし、中国人が近代技術というものを獲得できなかったのは何故かということで、西洋の学者達が言っているのは、そこに新奇なものを嫌うという儒教的な価値伝統というものが中国人にはあったんだと。例えば18世紀の初頭に清王朝で乾隆帝（けんりゅうてい）という人がおりましたけど」

水島「おりましたねえ」

宇山「ええ、この乾隆帝にイギリスの使節が訪れた時に、西洋自慢のオルゴールとか機械

仕掛けのものとか銃とか、そういったものを、その乾隆帝に見せた訳ですが、乾隆帝は全く感心せずに、それを浅はかな工作人の思い付きと言って笑って追い返したという訳ですね」

水島「うん」

宇山「まあ、これが儒教というものの傲慢さだっていることをヨーロッパの学者が今日、指摘している訳です。今、茂木先生の方から、エジプトとトルコの近代化の仕組みの構造というものを、お話し戴きましたが、じゃあ、中国はどうだったのかなんですけれどもね。中国は康有為（こうゆうい）という人がおりまして、この人が、所謂、立憲君主制というものをやれると考えていた訳です。清王朝、つまり存続させながら体制内で近代化をしていくということで、ソフトランディングとしてリアリティがあると考えていたのに対して、孫文は、さにあらずと言った訳です。

清王朝の体制そのものを、ぶっ倒して、そして民国を創るべきだ、共和制をするべきだと考えたのが孫文な訳です。日本では孫文のような、所謂、孟子的な易姓革命的な思考を持った人間というのは誰も居なかったというのが、この明治維新の本当に凄いところで、やはり、何故、明治の元勳達が、こういう立憲君主制をよしとしたのかということの理由ですが、一つ、やっぱり彼らはヨーロッパに学んでいたということ。

当時のヨーロッパというのは、立憲君主制っていうのがイギリスを中心として、ドイツも含めて執られていたということとを学んでいたということと、もう一つは先程も触れましたけれども、江戸時代以降の水戸学というものの伝統があって、これが皇統というもので、一つの国体というものが成り立っているという考え方は、江戸時代からずっと、明治の元勳にも引き継がれていたということがあろうかと思います。

そして、皆さんが先程、元老政治について触れておられましたですね。一旦、明治維新っていうのが成功して、そして明治憲法が出来た時に、そこから新たに日本という近代国家をどういう価値の下で動かしていったらいいのかという、価値の仕切り直しということをやっていかなければならない時期が訪れたんだろうと思います。

これが日清戦争を経て、日露戦争へと入っていく20世紀の初頭1904年までの動きだったと思うんですが、その時に驚くべき維新の元勳達の華麗なる転身というのがあったと思います。それまでは元老政治、藩閥政治というような形で、所謂、その薩長の維新の特権者達だけが政治の権限を独裁的に仕切っていたと。

まあ、大久保利通は民主主義というものを問われて、こんな日本には民主主義なんて未だ早過ぎるぞというようなことを言っていた。そのことを伊藤博文も引き継ぎましたけれども、伊藤博文は当初、こういうことを言っていたんです。『超然主義』ですね。

この議会というのは名ばかりの存在でね、実際には藩閥政府が物事を動かしていたということがありました。伊藤博文は、この『超然主義』によって、民主主義ということをするには、政治の門戸を民衆に開くということが未だ未だ早かろうということを言っていたにも拘わらず、しかし、それが1900年になると、伊藤博文はガラッとスタンスを変えて行く訳です。

今迄は、この官僚主導で国家を推進していくことが出来ただけけれども、しかし日清戦争で勝利したあとは、やはり政治の門戸というものを民衆に開いて行こうということで、立憲政友会というのが創られて行くと。民党のですね、立憲政友会、国民の政治参加を可能にしていく。まあ、ただ、極々限られた国民、上部のエリートの一部の人間だけにしか選挙権は与えられなかったんだけれども、それでも少しずつ、少しずつ、この民衆の参加ということを認めていくということが、新たな価値基準になるんだということを、伊藤博文は、やっぱり、きっちりと気づいていたからこそ、こういう立憲政友会ということを出した

有朋に猛反対をされながらも、これを必ずやり遂げるんだということで、立憲政友会を創っていったと。

そして、この立憲政友会を引き継いだのが、西園寺公望ですね。1900年代に入ってから、この桂園体制という藩閥政治と、西園寺達が率いていた民党政友会ですね。この交替で、所謂、民衆派と藩閥派が交替々に内閣を受けもっていくということを、ずっと20世紀の初頭で行っていったということは、本当にみごとで新たな価値基準の創設だと思います。

明治初期当初、日清戦争までは、やはり、しっかりと藩閥政治、自分達が明治維新、近代革命を起こしたのだから、まずは自分達が責任をもって物事を固めていくといった、ある程度、それが固まっていけば天意は民意ということで、この民衆にも政治を徐々に開いていく、自分達の特権を手放してでも、こういう形に国家を編成していかなければならない。

徐々に立憲君主制というものに舵を切っていかなければならないというバランス感覚は、世界史の中では本当に類稀なる歩みだと、私は評価致します」

水島「うん、うん。うん、あと、私はそのことを思うとね、やはり日本国というか大日本帝国としてと、所謂、共同制、共同意識、俺達は日本人だ。これが江戸時代からもうずっとね、ずうっと、それが支えになってね、反対があってもやれるというね、そのところが敗戦まではあったけども（失笑）、解体をずっと目指されたからね、その意識が日本人同士という共同性が徐々に、徐々にというか段々失われてきているっていうのはねえ」

茂木「これが凄い大事なところで、近代化に失敗した国っていうのは全て多民族国家です」

水島「でしょ」

茂木「はい」

水島「そこですよ」

茂木「何故、清国が駄目だったかと言うと、支配層が満州人ですから」

一同「うん」

茂木「満州人の政府が選挙をやったら、国会議員の殆どは漢民族で、満州人打倒と言ったら、どうするんですか。終わりじゃないですか」

水島「そうなるよね」

茂木「だから出来ないんですよ。うん。日本人は民族的に一体感があったから、別に民衆が怖くないんですよ」

水島「うん」

茂木「それで明治の藩閥政治というのが、僕は開発独裁だと思っているんですよ」

一同「うん」

茂木「うん。それで第二次大戦後の韓国や台湾やシンガポールが独裁政権の下で急成長していくと」

水島「そうなんですねえ」

茂木「うん。それから40年ぐらい経って民主化していく、シンガポールなんかは未だ独裁ですけども、それを明治政府は20年ぐらいで民主化して行って、だから、民族資本が政府に政治参加する、要するに、これがいわゆる自由民権運動でね」

水島「うんうん、うんうん」

茂木「伊藤さんは元々政府側の人ですけども、自ら政党、立憲政友会を作って、板垣と手を組んで政党政治に移行したっていうので、これも他に、外国に例が中々無いんですよ」

宇山「そうそう」

水島「ああ、そうなんだねえ」

宇山「無いんですよねえ」

茂木「うん」

富岡「もう一つ、今、宇山さんのお話は凄くて、価値の仕切り直しってというのは、その通りで、立憲君主制もしっかり形を作っていく、藩閥政治からそういうふうに変えていく。ただ、その時にどうでしょうか。その実際の機構として、やっぱり官僚制度が強くなってきますよね。だから、その官僚化していく、これは軍隊もそうですけれども、だから、それとの兼ね合いみたいなのが凄く難しくて、出て来る人材が、教育と官僚制度の中で成績が優秀なのが上に出て来て、次の代の軍隊なり政治を担うっていう、やはり微妙に矛盾みたいなものもあるのかなあっていう気はするんですね。

ですから226事件の頃の大將は、みんな、サーベルを下げた官僚だって言われますけども、一方でそういう問題もあって、中々難しいところが色々あって…」

水島「だから、今、言った様に教育の事を言ったけども、日本語と、勿論、方言もあるけれども、こういう形で統一的に多民族国家じゃないから、ベースは日本語っていうので、国家の意識とか共同意識とか、そういうところは凄く纏め易かったんじゃないかと。これは、ちょっと大場さんに聞きたいんだけどね（笑）、儒教とかそういうのっていうのは、漱石も鷗外も、みんなそうだけど、旦タ（たんせき）、今は、もう全く無くなっちゃったけど、それがちゃんとあるんですよ。

よくね、敗戦になった時、何の言葉を浮かべるかって言ったら『夏草や兵どもは夢のあと』じゃなくて『国破れて山河あり』って、これは向こうのね、漢詩の話。だから、我々は、そっちの方が出て来ますよ。恐らく今でも、そういうものが、ちゃんとあって、今、言ったように当時の場合は明治維新の中で、色々儒教とかそういうものがね、ある程度、消されるというかね。ただ習慣としてとか、そういう意識はずうっと残っていたんじゃないかっていうね。その辺はどうなんだろうと思ってねえ」

大場「はい。最初の方で稲垣先生の方から『天道思想』の話がありましたけれども『天道思想』と同様に『神国思想』ですね。戦国時代からあって江戸初期に出て来ます。これによって、日本人は文明的にも西洋とは全く違う国だと。お天道様っていうのが居て、みんなを見ているとか、或いは、日本は神の国であると。こういうのがキリスト教と完全に対置するといった国家間の中で、先程、僕が申し上げた『人倫と倫理の国造り』みたいなのが出て来たと。

そういった言語空間に生きることによって、実は、江戸時代は大量の藩に分かれていたけど、日本人だっていう意識は近代になる前からある訳ですね。藩があるけども、みんな、日本人だ。これは儒教の中に『修身齐家治国平天下』というような空間認識がありますから、自分の身から家庭、そして地域、国家っていう風になっていくので、藩と日本っていうのがバッティングしないんですよ」

水島「うん」

大場「そういう空間認識の中で生きている日本人に対して、近代が入って来た時に、近代的な、先程、最初に水島社長がソニー・タンの話をされて、民主主義というものが、ある種、押し売られているようなもので、その押し売られ方っていうのは、茂木先生が示されたような図式で対応せざるを得ないと。

この中で、宇山先生がおっしゃる様に、例えば伊藤博文は自分で変化しながら、それに対応していこうとした。その苦労自体は、何か先生方の名前を次々に申し上げて恐縮ですが、吉野先生がおっしゃる通り、きっと、あれこれ考えて最適解を探そうとした結果だと

思います。

しかしながら、そこで起こったのは、西洋的な文脈、西洋の言葉で語られている枠組みや世界観っていうものに置き換えないと駄目だろうという、ある種の大久保的な諦念というのがあった」

一同「うん」

大場「それに対して西郷隆盛は、それでやったら元も子もないだろうということで、江戸時代的な価値観で対抗すると。ここに悲劇が生まれる訳ですが、じゃあ、結局、どうなるのかって言うと、それこそ明治20年代に入ると、明治天皇が富山県の方に巡視に行かれたら、英語は喋れるけど日本語の読み書きが出来ない小学生が居ることにショックを受けて…」

水島「ああ～、そうでしたね」

大場「『教学聖旨』を出され、それから『教育勅語』に繋がっていくと。それっていうのは結局、西郷で挫折したものを、もう一度、復活させようとした動きであり、それは『人倫と倫理』という江戸時代の考え方を復権させようとした。つまり、日本型の考え方、漢字文化圏的な考え方での近代化が可能だという挑戦だったと。これが近代主義。ヨーロッパ中心の近代主義に対する抵抗であり、そのことを感じ取っていた。

例えば富岡先生の御専門の三島由紀夫は、明治維新から始まる西洋近代というものに、いかに抵抗するのかということのをテーゼとして出すので、陽明学とかが出て来る訳ですけども、我々はずうっと、これと闘っているんですよ。それをもって近代グローバリズムという風な命題の立て方をした場合、やはり失くしたもののっていうのは、西洋の宗教的なもの、西洋のイデオロギー、僕はこれを宗教だと思っているんですけども、こうした宗教的なものを設定して、日本人が本来、持っている生活の中で育まれる常識や人々の関わりの中で立ち現れてくる正しさというものを信じられなくなった。その結果、残虐性が出て来るとか、空理空論で共同体がぶっ壊れていくと」

水島「うん」

大場「これが、ずうっと、やはり明治維新は誰かが機として、悪い奴が機としてやったんじゃないくて、そういったものの世界観のぶつかり合いの果てに出て来た同じパターンっていうものを認識しなきゃいけないんじゃないかなっていう風に思いますね」

水島「う～ん。その通りだと思いますね。はい、吉野さん、どうぞ」

吉野「この今の明治の状況と、それから戦後の状況もそうだと思うんですけど、要するにグローバリズムが入って来て、それで何とか適応しよう」と

水島「うん、うん」

吉野「帝国憲法もあったし日本国憲法もあるんだけど、もう一個、17条憲法があるじゃないですか」

水島「ああ、17条ね」

吉野「そこまで戻ると。というのは結局ね、その物部氏と、それから曾我氏が居て秦氏も居て、まあ、はっきり言いますが、もうグローバル勢力ですよ。それで勿論、天皇家もあって貴族もあってっていう状態で、どう折り合いをつけるかっていうことをやった訳ですよ。

そこでやったことは、勿論、その哲学の中には中国思想も入っているけれども、結局、日本のやり方はどうやるんだっていうのを聖徳太子が創ったのが十七条憲法じゃないですか。一に曰くが、いつも言う通り『和を以て貴しとなす』で、二に曰くは宝云々かんぬんですけど、僕ねえ、一番大事ななのと言うとね、四からあとだと思うんですよ。つまり官僚こうあるべし、っていうのが全部、書いてある訳ですけど、その中で一番、大事なこと

が、何処の国にも無いのが一個、あるんですよ」

水島「ほお」

吉野「七に曰くで『妬むことなかれ』という（微笑）」

水島「う～ん…」

一同「ああ…」

吉野「嫉妬は許さんと。そんなことが憲法に書いてある国は無い。つまり、どういうことかと言ったら、個人主義をやめろ、っていうことですよ」

一同「うん」

吉野「個人主義になると、優秀な奴と駄目な奴が出来るから妬みが出る訳ですけども、その中で、ずうっと礼を大切にしなさいとかということが書いてあるのは、上の奴が言うことを下は聞け、なんだけど、そこには、ちゃんと礼があるべきだとか、それから、感謝の気持ちがあるべきだとか、愛という言葉は使っていないけれども、それに類するのがある。だから、僕は明治になって、最初、初期は上手くいっていた訳ですけども、その大日本帝国憲法は仕方がないとは言え西洋思想を入れざるを得なかったと。そうすると、順番で交替している内はいいんですが、その内に結局は、妬みが出て来るんですよ」

水島「うんうん」

吉野「それが軍閥政治になって来て、陸軍と海軍ですら嫉妬し合っていた訳だから。だけど、今、この『妬むことなかれ』というのを全然、教えないじゃないですか。その逆ですよね」

水島「うん」

吉野「成績がいい奴が、いい高校に行って、いい大学へ行って、いい暮らしをして、樂をして、あとは老後が樂だからやれとは『教育勅語』には書いていない訳ですよ。優秀な奴はその能力を自分の為に使わないで、国難の時にその能力を使えという思想があるから、特攻隊のような優秀な人達が行って来る訳じゃないですか」

水島「うんうん」

吉野「今のって全然、違いますよね。優秀な奴が、ただ樂をして金を儲けて自分さえ良ければいいってなっているっていうのが、僕はなかったのを、悪い意味での萌芽が出来たのが、多分、明治の中盤から終わりだったと思うんですよ」

水島「うん」

吉野「その『妬むことなかれ』というのを聖徳太子がつくったというのは、凄い事だと思うんですよ。うん。だから、今の学校の教育の場なんて妬むことを推奨しているじゃないですか。だって、かけっこやったって一番の方が偉いし、学校の成績もそうだし、本当は江戸時代なんて、かけっこなんか無い訳だし（笑）」

一同「（笑）」

吉野「模擬テストも無い訳だから、優秀な奴、力がある奴は、田起こしをするし、瓦を運ぶとか、体力のある奴はそうだし、だから優秀な人達は、みんな、ゆる～く繋がっているこの国の為に何かを尽くすってなるから、仮に戦争をしたとしても、最後は日本の為にと

いう思いが絶対にあったはずですよ。だから、それは先程のね、妬むことなかれっていうのは、会津の人達ですか、最終的には、やっぱり日本の為にやらなきゃいけないっていう風になったっていうのは多分、この七条が当時の明治の日本人に未だ残っていたと思うんですよ」

水島「うん」

吉野「今はもう全く無いですよ。みんな、優秀な奴からいい思いをしようとしている」

富岡「特に、この30年はそうですね」

吉野「うん。特にグローバリズム」

富岡「だから『公』っていう言葉を、みんな、知らなくなっちゃったんだと思います。だから僕は鎌倉市役所とよく喧嘩していたんですけど（失笑）」

一同「（失笑）」

富岡「そう。『公』って言葉を書けるか、ハムって書くんだよって」

一同「（笑）」

富岡「『公』って言葉が死語になっちゃった」

吉野「そうです。だから、その『公』があって『国際』があってグローバリズムじゃないですか」

水島「うん」

吉野「似たような言葉だけど、インターナショナルとグローバリストが違うのと同じだね」

富岡「違いますね」

吉野「この『公』っていう言葉は、もっと『国際』より大きい言葉けども、それが無くなったのは嫉妬だと思っています。嫉妬は個人主義ですよ。自分さえ良ければいいっていうのが、もう酷い」

水島「うん」

吉野「だから組織が崩壊する時って、必ず嫉妬から始まるじゃないですか。日本人っていうのは、それが無かったのに。自分達が『公』の人間であるということを、ちゃんと知っていて『足るを知る』とかね」

水島「うん。そうですよ」

吉野「能力があっても贅沢な事をしないと、やっているじゃないですか」

水島「必ずお陰様でとかね。御馳走様ですとか。戴きますとかね」

吉野「うん」

水島「そういうような言葉で、自分ひとりで生きているんじゃないっていうね」

吉野「そうですね」

水島「ただ妬みというのも、罪と罰じゃなくて直るものだということで、言っているんですよ」

吉野「だから妬むっていうことは、どういうことかって言ったら、憧れているか優秀か、どっちかですよ。だから敬意、礼があれば、尊敬すればいいだけなの」

富岡「力を解ってね」

吉野「うん、そう」

水島「だから非常に肯定的なね」

吉野「羨ましいなっていう思いが、あの人の様になりたいっていうのを、ずうっとやっていたのが修身じゃないですか」

水島「うん」

吉野「戦前までの教育。だから修身を教えなくなったところが、やっぱり、あるんじゃないかと。だから明治の内は、大したことがなかったのかもしれないけど、その萌芽があって結局、最後の一発をマッカーサーにやられたという感じじゃないですか」

富岡「ですから明治後半から大正の初めから、それこそ修身という言葉が非常に出てきますよね」

吉野「うん」

富岡「だから修身の教科書とか。新渡戸稲造が修養っていう、修身じゃなくて修養、養うという本を書いていて、その時、新渡戸が言っているのは、やっぱり自分とか、個人を超

えた価値というものの、だから、その水平、我々は、人と人との横の繋がりで生きているけど、もう一つは垂直。縦の空気を吸うことを覚えろと言っているんですね」

水島「うん」

富岡「だから、これは何か『天』で、儒教的な『天』でもあってもいいし…」

水島「うん、うん」

富岡「それでもいいし、そういう価値観を持っていることで、横の軸ってというか、その我々の横の共同体がある。やはり、それは個人とか人間を超えた『天』の価値」

水島「そうだね」

富岡「人間を超えた価値観があるからっていう、それを新渡戸がね、『修養』という言葉で、しきりに青年達に言って縦の空気を吸えということを言っていて、だから、それは、そういう危機があったから、その時に出て来たんだと思うんですね」

茂木「何故、明治の終わりかと言うと、非常に皮肉ですけども、ロシアに勝ちました」

水島「うん」

茂木「それで不平等条約を撤廃しますよね」

水島「うん」

茂木「それで関税までね」

水島「はい、関税もね」

茂木「バッチリ出来ました。結果、日本の資本主義がぐうわあ～～っと急成長しまして、そうすると貧富の差が出る訳ですよね。それで共同体が破壊されますよね」

水島「うん」

茂木「正に個人主義が広まったのが、明治の終わりから大正ですよね。それで、バラバラになった個人の不安感というのがあるグループは、マルクスに行きました」

水島「うん」

茂木「別のグループは、皇国史観に行きました」

水島「うん」

富岡「はい」

茂木「ということですよ」

水島「それとねえ、海外で言うと、今、おっしゃったロシアで勝ったでしょ、関税とかになったら、アメリカに行った差別が、めっちゃめっちゃ始まったんですよ。急に始まった」

茂木「そうです。逆に警戒されたんですね」

水島「そうです。反日感情がね。日本人はアメリカに向こうに行って以来、ずうっと何か親米感情が凄い」

茂木「うん」

水島「収容所の前までは本当に親米感情を凄く持っていて、大東亜戦争の時もね。だから、やっぱり今、おっしゃったように、その日露戦争に勝って関税自主権も取り戻して具体的にやった時、私が冒頭に言ったのは、何故、イエローモンキーが俺達に勝ったとかね、五大国になって黄色い奴が入って来て偉そうにしているんだっていうね。もう、そこをね、その要素、それだけじゃないですけども、その要素を、もうちょっと見てもいいっていうね。世界で初めてですよ、それは。イエローにしろ黒にしろね」

富岡「だから今、茂木先生がおっしゃった資本主義の問題で言えば、三島由紀夫が『文化防衛論』で言っているのは、つまり天皇の問題ですけど、要するに治安維持法が、資本家と国体を並べたと」

水島「う～ん…」

富岡「それに対するものは取り締まるっていうね。この時に完全に、明治の天皇制度はも

う駄目になったと。明治以来の天皇の在り方が、資本家と国体を一体化したのが大正 14 年の治安維持法だということですよね」

水島「まあ、統帥権の問題とか色んなものが出て来るんですね」

富岡「だから昭和に入って行くと、それが分裂して壊れていくってことですよね」

茂木「あと、もう一個あって、アメリカ自体があ頃が変わるんですね」

水島「うん」

茂木「それまではアメリカは、イギリスに商品売り込まれて来る被害者だったんですけども、アメリカが勝っちゃうんですね」

水島「そうですねえ」

茂木「うん。金融の中心がロンドン・シティからウォール街に変わっていく。そのウォール街が担いだのがウィルソンで、正に人種平等を否定した男じゃないですか。う～ん、だから日本も変わったし、アメリカも変わっちゃったという非常に不幸な…」

水島「そこが狭間だよねえ」

茂木「ええ」

水島「あの桂・ハリマン会談のね」

茂木「そうそう、そう」

水島「満州の問題も含めてね。稲垣さん、どうですか。この今の話で言うと」

稲垣「私達が求められているのは、やはり、先程の、ソニー・タンの言葉がありましたけど、やっぱり継続性ですね」

水島「うん」

稲垣「文明というのは継続性であると。それは西郷南洲翁の言葉で言えば『道』ということになると思うんですけども、明治憲法に帰れっていう話もありますけど、議論の為に、それを相対化したい訳ですけども、まず、何故、明治憲法が創られたのか、明治大帝ご自身がそれだけでは足りないということで『教育勅語』をつくられた訳ですけども、遡っていくと、結局、何の為に憲法をつくろうとしたかと言うと、明治の元勳というか初期の頃の考えでは、やはり不平等条約を解消するには、我々が文明だということを西洋に認めさせなければいけないから、その為に文明の体裁を整える為に、成文憲法を必要としたっていうところが出発点ですね。

そういったこともあるし、もうひとつは考え方としては、軍人との間とか、桐野利秋とかが言っていたのは外政ですね。征韓論とか出てきましたけど、外政をやる実力をつければ、相手は不平等条約改正に応じるだろうっていうのがあって、これが実現したのが日清戦争ですね。ですから、憲法というのを、最終的に欽定憲法という形で、伊藤博文が不磨の大典にしてしまう訳ですけども、ここで一旦、議論を、その継続性ですね。

その更に以前への継続性っていうものに結び付ける為に相対化しておく、まず、ヒントになるのが、戦後の日本には実を言うと国是があります。戦後の日本の国是を示して戴いたのが、昭和大帝の昭和 21 年元旦の詔書ですね。所謂、人間宣言って言われるやつです。

しかし、人間宣言のところをよく読むと、キリスト教的な GOD っていう現人神っていうのは否定されていますよね。むしろ、その文章をよくよく読んでいくと、むしろ、日本の現人神思想を再確認する内容になっている訳です。しかし、これは昭和天皇陛下にしては二義的な意味合いだったのであって、ここの 21 年の元旦の詔書の第一義は、前段のところにある五か条の御誓文で、これも『叡旨公明正大、又、何をか加えん』と。

これによって誓いを新たにして五か条の御誓文っていうのは誓いでした。神々への誓いでしたから、これを新たにして国門を開かんと欲すと。まあ、以来、そのことが書いてあ

るんですね。要するに、これ以上、付け加えることは無いと。我々は新しい日本を五か条の御誓文で再建するんだということを、昭和21年元旦に詔として示されていると。

だから、私達はこれを未だに成し得ていないし、この原点に返ることによって、明治維新の原点にも返ることが出来ると。明治人の徳富蘇峰は、この五か条の御誓文について、我が家は大和民族の歴史のエキスだと。日本の歴史を圧搾すれば、五か条の御誓文になり、五か条の御誓文を普遍すれば、日本の歴史となるとというぐらい絶賛しているんですけども、まあ、これは結構、開明的な文言だと言われていると。民主的だと言われている訳だけど、実を言うと、よく読むと、それは調べていくと違って、例えば、開明的だと言われるのは、四条目の旧来の陋習を破り、天地の行動に基づくべし、そして五条目の智識を世界に求め、多いに皇基を振起すべしというところですね。

ところが、これの原文を起草した由利公正が、自分の伝記の中で述べていることがあるんですけども、まず第一条ですね。原文では『庶民志を遂げ人心をして倦まざらしむるを欲す』これは、治国の要道であって、要するに、これは先程も話があったかと思うんですけど、大学に出て来る三大原則、三綱領というね、明德を明らかにすべし、民を新たにすべし、自然に留まるべしというのがあるんですけども、この四書思想を具現化した言葉であると。

もう一つが『士民心を一つにし、盛に経綸を行ふを要す』ということですけど、この『経綸』っていう言葉は『天』の言葉に直すと、詔に基づく政治ということですね。ただ単に経済だけじゃなくて。そして由利公正は横井小楠の弟子でしたけども、彼は、これは中庸、四書の内の一つで、一番、難解だと言われている中庸という書物の『中和を致して天地位し、万物育す』という天道思想に繋がるような文言があるんですけど、これに精神が反映されると主張しているということで、そういうことに倣って先程の第四条のようなどころを見ると、天地の行動に基づくべしっていうのが、所謂、バックボーンとしては、日本の『天道思想』、これは世界に通用するものだ。

この『天道思想』は既に、小堀桂一郎先生の『日本に於ける理性の傳統』という本があります。これは理性、日本人の道理の傳統、或いは宗教家であるとか、或いは、道元禪師や明恵上人も出て来るんですけど、文章を残した文人、そういったところから傳統を探っていく訳ですけども、これは現代が天道攷と呼ばれていて、天に結びつけられた我々は理性を維持して来た。

その傳統について表されているということで、やはり、これは、ここにも出てきますけど、戦国時代にはキリスト教の挑戦も受けている訳です。不干斎 巴鼻庵（ふかんさい はびあん）(Fabian) という人が出て、お坊さんだったんですけども、このお坊さんがキリスト教に入信して宣教師になるんですけど、やがて林羅山との論争を経て帰郷して、どちらかと言うと儒教に近い考えに至ると。

そういった中で、今度は徳川家康の側近が書いたといわれる、一人は藤原惺窩（せいか）とか、或いは、神龍院梵舜（しんりゅういんぼんしゅん）、或いは、本多正信という人が書いた『天道思想』の三書と呼ばれるものが流布して、色んな形で学問の普及という形になっていく訳ですから、それを、どんどん遡っていくと、まず一つは縦軸の道として、万世一系の天皇陛下というものが、我々にはある訳ですけど、国民の道徳として、在り方として、こういう『天道思想』ですね。

仏教、儒教、神道が混然一体となって、色んな人が出て来ますけども、これに出て来ないような政治家としては、例えば信長ですね。彼は、キリスト教徒、ルイス・フロイス宣教師とも会っていますけども、その話を聞いて、やがて自分は天主だと。万物の創造者、主にして生きた神仏だと、まあ、そこまで言っちゃう訳です。

家康は『天道思想』だったし、そして家康も天道を法の理ということで、それを非常に恐れながら天下の政治を行ったということで、やっぱり、それは政治にも応用できる。世界に誇るべき本当に深い思想を、我々は持っていますので、やはり『道』ということ言うならば、私達、日本国民の心構えとしては、そういったところまで追及する必要があるんじゃないかなと思います。ちょっと長くなりましたけど」

水島「ということは基本的に、昭和天皇も御心の中に『天道思想』というものをもちにあって、戦後、ああいうものが発表されたということですか」

稲垣「ああ、いえ、別に、これが『天道思想』だったということではないですけど、そういう流れの中の一つとして、五か条の御誓文というのが位置づけられると。でも、これは、あくまでも神道の儀式に則って、これは理論があったけど、だから、要は支那流ですね。向こうの皇帝流のやり方だと、軍神に誓う形になるけど、我が国は日本だから皇祖皇宗に天皇陛下自らが率先垂範を誓うという、そういう神事に則って為されたという点で、そういった意味で本当に日本化されたものが五か条の御誓文で、昭和天皇陛下はこれに則って新日本を再建しようということをおっしゃった訳ですから、これは、もう本当に五か条の御誓文、更には日本の古い歴史、或いは、神々と繋がっていくものが、一つの『道』として、一気に日本の歴史を貫く形で取り戻せる一つのきっかけと言うか、指針になると思うんですね」

水島「なるほどね」

稲垣「ですから、私は今、ここで、それを紹介したかった訳ですけど」

水島「うん。『天道思想』ですね。はい」

稲垣「はい」

水島「はい。みなさんから、いいお話を沢山戴いているんですけど、段々終わりの時間が近づいて参りました。もう9時になっちゃうんでね、一人一人、纏めの言葉をね、纏めっ言うか纏められないかも判らないけど、感想としても、お一人ずつ、一言、お話し戴けますか」

富岡「はい。今日のテーマが明治維新、近代グローバリズムですけども、やっぱり最初に議論した通り、現代の正に令和の今の問題だと思います。だから、これからの高市政権の可能性もあると思うけれども、やっぱり明治の時代がグローバリズムに対して、明治のある時期まで、ひとつの防波堤として、その中で国家を創ろうとしていたっていう歴史的な経緯というか、そういうものを、もう一度、捉え直して行く必要があると思いますね」

水島「いや、本当に」

富岡「グローバリズムはあかんと、断固、あかんのだという（失笑）、ここに、いいことは一つも無いんだっていうね」

水島「いや、ここが、そうですね、今」

富岡「そういう何て言うか誠ですよ。そういうのを指導者が持つかどうかですね。明治の指導者は持っていたと思いますよ」

水島「うん」

富岡「それは国を開かなきゃいけない。富国強兵をやらなきゃいけない」

水島「うん」

富岡「西洋の制度も入れなきゃいけない。けれども、断固アンチ・グローバリズムだっていう魂はね、それは伊藤だって、みんなが持っていたと思うんですよ。うん。だから、その覚悟の問題じゃないかなと思っていますね」

水島「だから、私はね、B R I C S と呼ばれる人達とかね、今、アメリカ主導の世界から、やっぱり、ある種の転換が、まだまだかも判らないけどね。そういうのが起こり始め

ているっていうのは、さっきのソニー・タンの話もそうだけど、やっぱり、ちょっと違うねえっていう感じがね」

富岡「そうですね」

水島「グローバリズムの中でね」

富岡「それで僕は、もう一言だけ、グローバリズムとは何かって言うと、これは、ある種のニヒリズムという、ひとつの形態だと思うんですよ。ニヒリズムっていう形態でね。これは全体主義、つまり1930年代では、ナチズムとかスターリニズムになる訳ですよ」

水島「うん」

富岡「だから、やっぱりグローバリズムの正体は何かって言うと、ニヒリズムの一つの形態だというね」

水島「うん」

富岡「そういう認識を持つと、もう少し深い次元でものが見えて来るんじゃないかなと思いますね」

水島「だからね、AIの発達というのは本当に心配ですね」

富岡「うん」

水島「正直、言うと」

富岡「うん」

水島「自分でやって徹底的にスーパー・コンピュータを使ってね」

富岡「そうですね」

水島「一番、今の反グローバリズム的な人間の意識をね。最近、色々出ていますからね。これも、またグローバリズムとAIというのはね、本当に考えなきゃいけないと思っているのは、死んだ人を生き返らせちゃっている。NHKの特集で観たけど、韓国のケースで、死んだ子供の映像とか色んなものが残っているから、お母さんが、もう子供が死んだんだという意識が全く無くなって…」

富岡「それは大阪万博でやっていました」

水島「ね。それ、やっていましたね」

富岡「ロボット館で。AIロボットね」

水島「例えば、失礼ながら富岡さんが亡くなっても、いつまでも富岡幸一郎が現われて、ここで色んなことを言う可能性があるんですよ」

富岡「(笑)」

水島「本当にそういう時代がね。だから、例えば、我々が今、冗談で言っていて、これ、どうなんだって言ったら、西部邁という人物が居た。西尾幹二という人物が居た。あれだけ西尾幹二全集があるし、映像でも色々なことを発言している。ということでAIにぶち込んだら色んなものが出て来る訳だけど、どうですか、ウクライナ情勢はって言ったら色んなことを、どんどん答えちゃう可能性があるということもあるんでね(失笑)、グローバリズムの怖さっていうのは仮想空間でも…」

富岡「ニヒリズムですよ」

水島「ねえ。実際の世界のグローバリズムとか思想だけじゃなくて、そっちの部分も危ないのがあるなって」

富岡「だから故郷と肉体を奪うんですよ」

水島「ね」

富岡「要するにね、それ、リアルに」

水島「そういった正にニヒリズムですよ」

富岡「ニヒリズム」

水島「はい」

茂木「田中角栄が人生論を喋るっていう動画があって」

水島「ああ、そうですか」

茂木「うん。あの声で」

富岡「ああ、あれがそうなんですか。田中角栄ですか」

茂木「うん、そうそう。その中にメールが来たらとか言っているんです。メールは未だ、ねえだろっていう話（笑）」

水島「ああ、そう（笑）」

茂木「ええ」

水島「いやあ、だから、そういうのがあり得るんですよ」

茂木「あり得ますよ」

水島「結構、リアリティがある感じでね。ひとつ、前にあったのは、メールで死んだ恋人とやり取りしていたら、担当者だか技術者だか分からないけど、突然、僕は君が望むような天国に居る訳じゃないんだと。真っ暗な地獄なんだと。苦しんでいるとかって言うから、こっち側が本当にノイローゼになっちゃった。なぜAIがそう言ったか判らないっていうね。勝手に言い出しているとかねえ。もう、それこそ神をも恐れぬような世界が展開する可能性がある。じゃあ、纏めを。どうぞ」

茂木「よく学校で教える開国の話ですけれども、日本はアメリカに脅迫されて国を開かざるを得なかったって。アメリカは悪い奴ってなる訳ですけども、実は、あの頃、本当に悪かったのはイギリスですよ」

水島「うん。そうです」

茂木「ええ。あの頃、アメリカは未だ途上国だったんですね。それでイギリスが清国に、めっちゃめっちゃやっているからね、日本が同じ目に遭う前に国を開いた方がいいよってペリーが言って来た訳で、だからアメリカと結んだ条約では関税率が20%でしたね」

水島「うん」

茂木「うん。その後、イギリスが乗り込んで来て、あのパークスが来て、それを5%に下げろっていう訳ですよ。だから、どっちもグローバリストですけども、グローバリストと戦うのにグローバリスト全部を敵に回したら勝てない訳で、何処かに組むしかない。ということじゃないかと思うんです」

水島「うん」

茂木「うん。だからねえ、まさか軍艦に対してナギナタや竹槍では戦えないですからね。まあ、そういうことで光と闇があるけれども、僕は明治維新は、よく頑張ったと思います。はい」

水島「まあ、本当に頑張っていますね。はい（苦笑）。はい、吉野さん、お願いします」

吉野「問題が起こった時に、どのように解決するかと言ったら、革新の人は実験する訳ですよ」

水島「うん」

吉野「社会主義も共産主義も全部そうでしたけれども。じゃあ、保守って何だって言うのと、定義になる訳ですが、過去に起こったこと、日本で言うんだったら、神話からですね。スサノオが暴れたのも全部、教訓で、そこに必ず答がある訳ですよ。つまり、歴史と伝統を大事にするっていうのは、実は問題解決力ですよ。いかなる民族も過去に色んな経験をして、痛い思いや怖い思いをして解決しているから、今、その民族が生き残っている訳です。引き出しがいっぱいある訳ですね。これを一切、見ないで新しい事をやるっ

ていうのは馬鹿ですよ。日本は、その中でも一番、引き出しが多い国のはずですよ」
水島「うん、そうですね」

吉野「これだけ長く、少なくとも2685年はあって恐らく数万年はある。だから、歴史と伝統を大切にしろということ、ただ単に昔のことを守れということじゃなくて、未来を守ることだっていうことが多分、この明治憲法、或いは、明治維新の中でも学べし、それ以前のこつていうのを、今日、皆さんがご提示した色んな事がある訳だから、もっと日本の歴史の本質的な事を知れば、それが、これから起こるグローバリズムに対抗する答が、そこにあるんじゃないかという風に思います」

水島「はい。宇山さん、お願いします」

宇山「はい。今日、私は、明治維新の肯定的な側面を強調して申し上げましたけれども、同時に明治維新には、やはり多くの害悪とか悪弊とか矛盾というものもあった訳です。その最大のものが、官僚主義ということ固めていったということだろうと思うんですね。伊藤博文は民主主義というものをやろうとしたと。そして民党というものを設立していったんだけど、結局、日本人には西洋型のデモクラシーというものは根付かなかったんだろうと思います。日本というのは、やはり和合主義、調和主義であつてね、あぁいった西洋の議会制民主主義だあというようなこととは大分、異質だったと思うんですよ。それよりも投票で選ばれた人達より、試験で選ばれた官僚達が偉いんだというような思い込みを、我々が今日に至るまで、そういう幻想を抱き続けて来たと。官僚というのは無謬性ですね。間違いをしないという、無謬性っていうのがあると。その無謬性ということで官僚は神格化されて、そして現在に至っては、経団連とかと結びついてグローバリズム政策を推し進めていると。

この官僚主義の政治というものは、明治以来、今日まで、ずうっと続いており、それを打破することが出来るかどうかというところで、日本の政治がグローバリズムから脱却することが出来るかどうかというところの大きな岐路、分かれ目になっていると思います」

水島「はい。有難うございます。では、大場さん、お願いします」

大場「はい。やっぱり近代グローバリズム、グローバリズムっていうものが、例えばキリスト教であるとか、或いは戦後民主主義とかと同じでして、要するに何か絶対に普遍で、正しい存在、観念的、抽象的な存在なり考え方があって、みんなはそれに従えっていうものが福音の様にやって来ると。その都度、日本人は、それを拒否していった訳で、ただ拒否していく過程の中で、例えば、明治維新は、これまで、お話に出た様な様々な格闘があり、中には、そうして向こうの型に嵌った方が逆に日本は生き残れると思ったけれども、それは日本そのものを溶かしてしまう作用になる危険性もあった。

ただ本人はそういうつもりではなかった。これって、もう、それこそ、今、吉野先生が、おっしゃった通り、これも一つの物語であり教訓だと思うんですね。僕の出身は北海道ですけれども、北海道っていうところは西郷隆盛の愛弟子の永山武四郎が長官を務めていて、開拓をやったのは会澤藩士ですよ。だけど、この両者は別に薩摩だと、おい、会津とって殺し合いはしないんです。

やっぱり、その歴史で語りはしませんけれども、同じ武士として同じ日本人として、日本を、これから良くして行こうっていう歴史の地層の中で怨讐を超えて行って、綺麗事ではないですけれども、それを引き受けた上で一緒につくって行こうというふうにしていたと。

結局、ここが最初に申し上げたように、日本人って『人倫と倫理の国』ですよ。今、目の前にしている人と誠実に向き合って、関係性をつくる中で日本を創って行こう。そういう発想が出来るのは、要するにキリスト教や戦後民主主義やグローバリズムっていうよ

うな宗教を信じていないから出来る訳であって、それが日本の良さであると。だから我々の今日の話は色々な立場の話が出ましたが、これ自体を全部、我々が引き受けて考えて、じゃあ、自分ならどうするということに、実は新しい日本の在り方が出来るのであり、それは同時に今、最初に宇山先生がおっしゃったように長州はテロリストだとか、幕府は何も解っていない馬鹿な連中だったとか、そういう浅いところでの歴史議論っていうのは保守派であるほど、すべきじゃないんじゃないかなという風に思いますね」

水島「全くそうですね。はい、有難うございます。じゃあ、稲垣さん、お願いします」

稲垣「あ、はい。ちょっと先程、詰め込んで言っちゃったようなところもあるんですけども、先程、富岡先生からグローバリズムの話があって、それはニヒリズムであると。それは私も賛成ですけども、その西洋を破壊したグローバリズムですね、欧米諸国を破壊したグローバリズムの根底にあるニヒリズムという毒を仕込んだのが、グローバリスト達だと、僕は思っています。

最近になって色々な事件で、かなり顕わになって来ていますけど、要は、その根源にあるのは旧約聖書、トーラーですね。立法と言われるユダヤ教の経典ですけども、それと、プラス門外不出の書ですけどタルムードだと。それによって西洋も同時に破壊されて行った中で、日本も今、同時に遅れながらですけども、破壊されていっている。私達は、この大きな流れに抵抗して日本を守らなければいけない。この時に、やはり先程、言った文明ですね。

継続性は『道』だと思いますけど、それは日本人には恐らく未だ未だ残っていると思いますので、その見失った『道』を、もう一回、取り戻す、例えば大好きな先人達、英雄達、或いは思想家に学べばいいと思うんですけど、それを突き詰めて行けば、やはり、大きな意味で、かなり裾野が広がりますけれども、所謂、『天道思想』、いつも言っているところの神道を土壌にして、それと儒教と仏教が集合して、そして、それには道教だとか陰陽道とか色々入って来る訳ですけども、その軸となるのが三つの価値観で、それぞれの人達は非常に立派に生きて来られたということに学びつつ、私達は今、取り戻す努力をしていく中で、その道の先に新しい日本が見えて来るのかなぁと思います」

水島「はい。有難うございます。本当にこの問題は、富岡さんがね、これは結局、グローバリズムはニヒリズムに行きつくってということと同時に、やはり我々の国とかロシア正教というのは、原罪論を持たないですよ。元々我々は汚れを清めれば、本来の仏性や人間本来の姿に戻って来るというところがあって、やっぱり、そこのところだと思うんですね。

それと、もうひとつ、実は大袈裟に言うと、私はクリスチャンになろうかと思ったぐらい、ある程度、聖書の勉強に、のめり込んだ時もあったんですよ。その中でマタイ伝の『汝、姦淫するなかれ』心の中で姦淫しても、それは姦淫したことになると。私は、キリスト教を使ってマルクス主義を克服したかったんですね。心の問題というところで、クリスチャンになることを考慮したけど、実はマタイに出会っちゃって、つまり、考えが違う事、違う奴だったら罪人だと。これはスターリン主義じゃないかと。それがベースになっているんじゃないかと。

それで神が居る間は善がちゃんとある訳だけど、神が死んだっていう状態になったら、本当に西洋で神が死んじゃったら、ニヒリズムが蔓延するじゃないかと。あとは金儲けと収奪とね、そういうものがどんどん起こっていく。それがどんどん世界中に蔓延していくというのがありましてね。

そのマタイと出会ったことは、私が禅の方に行くきっかけになっている。要するにマタイが悪いということじゃないですよ。本当に、そういう、きっちと立法とか、そういうの

をちゃんと守りなさいってことですけど、実は、そういうのが共産主義っていうか、マルクスとかそういうもののベースになっているんじゃないかみたいなのがあったので、そういうことがありました。

でも、それに比べると、我々の国は、お天道様が見ているよおとかね（笑）、お陰様で有難うございますというような社会で良かったなあっていう気がします。もう一回、良かったなあと考える社会を取り戻さなきゃいけないと思います。皆さん、今日は、有難うございました」

一同「有難うございました」

***** お わ り *****